

ようかい

いのかしら

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

さおりんを愛するか迷う人の話。

『彼女は自分の隣に住まう人であった』

・さおりん大学生想定なので独自設定許して

毎週土曜20時更新予定

1	十	白	八	聖	六	五	四	三	二	序
1										
123	101	84	67	51	41	31	22	11	4	1

# 目次



## 序

たった数十年ほど前まで、この感情が実体を伴わないのは当然であった。

さらに100年以上遡れば、いや遡らずとも玉川上水を見れば、それは悲劇や狂気と一体ですらあった、玉川上水を見たことはないのだが。

女が縁側から垂らした足の爪先をその下に隠れた男が首筋に当てる、それが互いにその感情を持つ証明であったし、布団の残り香こそが真実の愛の証だったのだから。

この形でこれまで全世界でどれだけの人間が命を落としか、知る方法はない。だが少なくともその手の話は紙の上で衆目を引くものであったし、モデルとなる出来事も一定数存在していたのだろう。

そしてその手の話が流行るからには、人に理解され人の心を動かす性質を持つのだろう。

であったとしても、そのような感情に実際になつてみると、なかなか自分でも理解し難いものなのだ。誰のものかと問われたら親のもの、というのが一旦納得されると思わ

れるヒトを、自分のものとしていたい。そんな感情が健全なものであるとはどうにも信じ難い。

生物の面から人間を考えてみても、生物の目的にとつて絶対に必要なものでもないのだ。

そして何より、自分が人の運命を積極的に差配しようとする権利を持つていていいのか。バタフライエフェクトのような形ならいざ知らず、人の人生に介入して良いものなのか。

それをこれまで成し遂げてきた幾多の偉人と見比べると、自分のなんと力も魅力もない人間であることか。

何か人と比して優れたものがあるわけではない。絵を描く、ピアノを弾く、美しい文字を書く、歌うなどなど人の織りなす多種多様な技術において、私は自分より優れた人間がいることを知っている。

そしてそれは数が絞られた特殊なことに限らない。学問においてもそうであるし、人付き合い、人の前で話すなど多くの人が経験する、そしてできねばならないことについてもそうである。

端的に言えば私がこの直後に急逝しても、世界は何も影響を受けるまい。親兄弟ですら自分が死んで何か思うのだろうか、況んや他人をや、といった有様である。

生憎私もこの親兄弟が死んでも泣くことはないだろうが、この人らには死んで泣いてくれる人がいるだろう。予想が付く。

そんな人間のこの感情の行く末が求める理想が、所詮は凡人の幻想に過ぎないことを証明し、この迷惑要素を自分から排除しようと思う。排除して現実のものとしないうことこそ他者との関係、社会を見据えた上で最善であると。

そしてこの手の話は順序立てて話をしていくことが肝要だ。その非現実性を示して自分も納得させてしまおう。

誰かが言った。

『この世に不可能はない』と。

だがそれを言える人間は一部に限られるのだ、世にはどうあがいても不可能なものは存在するのだ、と。

大学生という身分は人生の夏休みとよく形容される。なるほど夜に酔っ払いながら並んで歩く集団や旅の様子をTwitterに上げている知り合いを見ると、なかなかその表現は適切であるように思える。

実際に自分も形は違えどその枠内に収まっている。大学の授業や課題などはあれど、別にそれが自身の生活やこの先の人生の営みに直結するわけではない。

仕事であればこうはいかない。結果を出せねばもつと有能な人間が優先されるであろうし、雇用を維持する方が損だと考えれば首を切られる。それがこの資本主義が染み込んだ社会に求められる合理性だ。

費用面を除けば合理性抜きに希望する学問の道を選べる、というのは確かに社会の枷を逃れられるオアシスとも呼べるだろう。

そんなオアシスを得るために自分は近くのアパートで一人暮らしをしているのである。自分自身そんな大学生活でこのような機会があらうとは考えてもいなかった。



## 水戸大学

自分の通う県下でも有数の大学である。自分の脳みそで受かることのできる最大の大学である。その経済学部生というのが、自分の現在の肩書きだ。

山の中から海の上を経て辿り着いたのが、この場所だった。そしてこの平野の上の一軒のアパートの3階の隅の一室が、今の自分の住処である。

部屋は6畳一間、布団と机と本棚を置くと大体のスペースは埋まってしまふ。あとはコンロ一つと水道、ユニットバスにトイレに洗濯機。だいたい近代個人として生きる上で必要なものは揃っている。

大学までは自転車で15分。下の駐輪場にはママチャリを一台確保してある。その道中に東親という安いスーパーがあるので、そこで買い出して飯を作ることが多い。

そして件のお相手というのが、隣の部屋に住む女性である。だが女性というよりも先に『武部』という名字を知った。特に物珍しさはない。

彼女の顔を初めて見たのは、入学前の引越しの作業が終わってからすぐに隣に挨拶に行った時だった。隣がどんな人か知らないものだから、手土産は手軽に作れる素麺にし

ておいたはずだ。

この手のものは蕎麦が定番と言われるが、蕎麦はアレルギー持ちだった時が怖い。自分も記憶はないがかつて卵にアレルギーがあったと言われているため、その点は注意したい。あ、小麦もあるか。

知らない人の家のインターホンを鳴らすというのは、なかなか踏み出しづらいものである。だがドアの前で辞めるわけにもいかず、意を決した。

「はい?」

ドアを開けて出てきたのは、自分より背の低い人だった。視線の先には茶髪の頭頂部、そこから視線を下ろしていつて女性であると把握した。

「えと……隣に越してきた高田といいます。よろしくお願いします……」

若い女性なんて教師以外久しく見た記憶がない。その性質だけで自分の制御を難しくする。

「どうも」

「えー……こちら、つまらないのですが……」

素麺の袋を手渡してとつと立ち去ることにしよう。挨拶なのだ、長居する理由はない。

「あ、ありがとう。えーと、お返しは何かあったかな……」

「いえ、大丈夫です。今後ともよしなに……」

頭を下げてすぐに自室へと戻る。まだ段ボールが数箱開けずに残されている部屋に着いても、なかなか心拍が落ち着かない。

男子校を卒業し浪人を一年挟んできた。予備校でも講師以外とほぼ話すことなく生活してきた。そしてその講師は多くが男性であった。

そんな人間にとつて急にこんな機会が生じるとここまで混乱するもののだろうか。自分に困惑を隠せずにいた。

そこまで長い時間は経っていないはずだ。今度はこちらのインターホンが鳴った。

郵便物なんかも住所切り替えているし来てもおかしくはない。一つ深呼吸して息を落ち着け、とにかく冷静になる。

何気なく玄関を開けるとその向こうには彼女がさらに低い位置に立っていた。

「さっきのお礼、今手持ちでこれしかなかったんです。こちらこそよろしくお願ひします」

「あ……はい……」

胸元にビニール袋を押し付けられ、まともに返事を返せたか自分でも分からぬままに、よくわからないが爽やかな香水の香りを残して向こうも帰ってしまった。

「……なんだこれ？」

向こうも急ぎだったのだろうか。確かに学期変わりの忙しい時期ではある。その点無頓着だったのかもしれない。

いずれにせよ貰ったものは貰ったものだ。こっちで処分していいということだろう。中身はこれもビニールの包装をされた……干し芋、のようだ。

冷蔵庫に仕舞う必要は無さそうなので一旦その上に置いた。食べるものには特別変なこだわりを持ってないと思うが、その干し芋についてはゆっくり食べ進めたくなつた。

その後夜疲れていた際などにゆっくり食べ進めた。甘くて美味しいのはいいのだが、口の水分を吸われる上にやけに粘着質であった。

隣というだけである。その後は新歓やら履修選択やら月曜1限に必修科目が入るや

ら、などの入学後のゴタゴタが続いたこともあり、特に関係が深まる理由もなかった。自分は高校も一応運動部であったし体育会系を目指した。そこまで運動神経がいいとは思ってないが、体を動かし汗をかいて損はない。

大学ともなると高校ではあまり聞かないスポーツも体育会系として存在するようになる。ラクロスとかアーチエリー、自動車なんてものもある。生憎免許はないのでパスする他ないが。

自分は結局高校時代にもやっていたバレーボールに行き着いた。かといって自分の身長は176。180越えは当然のようなバレーボール社会ではチビの無類に入る。

もっとも高校でも既にスパイクは打っていなかった。高校時代は一応セッターをやっていたので、大学でももちろんその枠を狙った。ただ同期にもっと上手そうな奴はいたのでそう易々といかないだろう。

新歓では飯に連れ出されイベントも挟みつつ、5月になって正式入団となった。その頃になると語学などで課題も出始めていたが、まずは生活は落ち着きつつあった。

彼女とは朝のゴミ出しや夜たまたま同じ時間に帰る時など顔を合わせる機会があった。だが別にその時に会話をするわけでもない。会釈のみや軽い挨拶を交えるだけなのが常だった。

彼女と次にきちんと会話したのは、5月に入ったある日のことであつた。金曜日に練習が終わり自室で飯を摘もうとしている最中、自室に彼女が訪れた。

なんでも彼女の部屋に彼女の友人が集まるそうで、少し騒がしくなるかもしれないことだった。別に自室で騒ぐわけでもないの、何か口を挟む理由もない。

実際その後少々騒がしくはなつたものの、飯と課題を邪魔するものではなかつた。だが日付を超えるあたりで課題に目処を付けた頃にもまだ少し声が出たものだった。

翌日の朝早くに出かけてしまったので分からないが、どうやらそのまま夜中もずっと続いていたらしい。夕方に謝られたが、また問題ないと返したはずだ。

その程度であつた。

そこまですなりの彼女のことは知らなかったし、興味も大してなかった。お隣さん以上では決してなかったのだ。

だがそれ以上への関係があり得る段階へと動いたのは、試験も見据えて動いてきた6月のある教養科目の授業が終わった時だったと思う。授業を受ける際は眠い時でも前方に座ることになっているのだが、片付けをしていた自分の背中側から声があった。

「あ、やっぱり高田くんだよ。ちよつといいかな？」

それが武部さんだった。他にクラスでこの授業を受けている人間も少なく、まわりの視線をそこまで気にしなくていいのは幸いだった。

服装はごく普通の一枚生地ワンピースだったと思う。

「……………んにはは」

「急で悪いんだけど、先週の授業のノートってある？」

「先週の授業、ですか？ありますけど……………」

「写させて！」

なるほど、先週の授業を休んだようだ。幸いこの後練習が始まるまで多少の時間の余裕はある。何時間も奪われるわけでもないし付き合ってもいいだろう。

「構いませんよ」

「ありがとー！助かる！」

近場の空き教室にて席を離しながら、彼女は自分のノートを食い入るように見つめていた。自分は他の授業の課題をパソコンを取り出して進めておく。

別に話さなければならぬ理由もないが、話す機会というものも作って良い気はした。貸しているのだからそのくらいはいいだろう。だがその意を決するだけでも少々時間を要した。

「何か……あつたんですか？」

「えっ？……ああ、この授業休んだ話？」

首を少しこちらに向け、反応してきた。ちようどページの区切りであつたようだ。

「公欠よ公欠。それは通ったけど補修はないのよ」

「公欠ですか……そういえば武部さんって何をされてるんですか？」



「戦車道」

「せんしゃ、どう」

「そう。夏の全国大会予選の県大会が始まつてるんだけどね」

戦車道、か。

名前はもちろん聞いたことがある。とはいえ戦車に乗って大砲ドーンとやつてる女子がメインのスポーツ、というくらいだが。この大学は県内ではかなり力を入れており、全国的に見ても強豪と見られている方だというのは聞いたことがある。

「今年も無事全国大会は行けそうなんだけど、顧問が秋以降は落単数もメンバー選考の参考にするって言い出してて、こーゆーのも気が抜けないのよ」

「なるほど……」

しかし……この授業を受けているところを見るに、武部さんは自分よりせいぜい一学年上程度のはずだ、つまりは大学2年。それでメンバーに選ばれているということなのだろうか。

「武部さん……こう聞くのも変かもしれませんが、何年でしたか？」

「あ、言つてなかったっけ？2年よ2年」

おそらく現役であろう。自分が一年浪人しているので、学年は違うが歳は同じ形か。自分の周りでは時々こうして時空の歪むことがままあるが、ここでもか。

「凄いですね……2年で選抜されるんですか……ここの戦車道は結構有名だったと思うんですが」

「まあねえ」

なかなか自慢げな顔をしつつ、次のページを映す作業に取り掛かっていた。自分も止めていた打ち込みを再開した。

そこから10分ほどで自分の手元にはノートが戻ってきた。

「いやー、ありがとね。助かった助かった」

「いえ、こんなことでよかったら全然……では、自分この後練習があるので……」  
「あ、そうそう」

ノートをしまい早めに部屋を立ち去ろうとした時、再度彼女に呼び止められた。

「お礼、何かしたいんだけど、何がいい？」

「お礼なんてそんな……」

「いいのいいの、細かいこと考えずにバーンと、ね？」

バーンと、と言われても、もともと宮沢賢治ほどではないが欲は少なく生きてきたつ

もりだった。さらに別に何か高度なものを提供したわけでもないし、見合うものとなればそうそう価値のあるものを要求するわけにもいかない。こっちの家で飯が欲しいとかね。

少々考えた結果、あることを求めることにした。

「そしたら、武部さんの出る次の戦車道の試合を教えてくださいませんか？」

次の試合の情報。相手にそう負担になるものでもない。それに今まであまり見たことのない戦車道を知る機会、というの也不错くない。

「あ、そんなのでいいの？えーっと次は来週の日曜日の13時から、常陸大宮の方の演習場で試合なんだけど……」

「日曜日ですか。ありがとうございます」

幸い来週日曜なら練習も試合も用事もない。課題もまだ来週なら大量に出ることもなく、特段他にすることもない。

こうしてスマホで現地への行き方だけ確認し軽く礼を述べて、部活の練習準備のため体育科棟に急いだ。

日曜日、現地で県の大会の決勝ということを知った自分だが、平地と山地に跨る会場

は快晴に覆われていた。夏はかなり近づいて来ているが、半袖であればそこまで暑さによる不快感はない。

席は無料のようだ。手持ちはあるが交通費もあるし、無駄に使いたくはない。これ幸いと水筒片手にとんでもなくデカイモニターの正面に陣取ることにした。

戦車道はかつてから映像のスポーツだったという。野球もプロレスも街頭テレビの普及とともに拡大したじゃないか、とも言われるが、それとは異色の意味である。

戦車道の観戦はその安全上の都合から観客は会場からかなり距離を取る必要がある。何せ試合で使っているのは実弾。流れ弾一発でも観客に当たれば、いや近くに着弾するだけで洒落にならないのだから。

故に戦車道で使用される戦車の質が上がる、また戦車道が競技として隆盛するに伴って、戦車道にとって映像は不可欠なものとなったのだという。パブリックビューイングの導入でも先陣を切ったりしている。

現に自分の目の前にあるのはそれだ。試合そのものではなく、その画面越しの世界を眺めることになる。

さてその戦車道の試合であるが、当然のことながら最初は彼女がどこにいるのか、何

をしているのかなどサツパリわからなかった。

それもそのはずである。彼女がこちらの大学のチームのどこにいるのか、何をしているのか知らなかったし、何より戦車の中にいると外からはどの車輛にいるのか判別がつかないのだから。

おまけに戦車もみな似たような奴らばかりである。細かい違いはあるのかもしれないが、そんなものは知らない。

それにしてもこの戦車道というものは、大局的視点から見なければ何をしているのか理解し難いものだ。そしてその視点を最も把握できるのは会場から離れたところにいる観客たちなのである。

向こうの戦車があゝの山の裏をぐるっと回ってきてると読んで対応する部隊を向かわせる。観客はそんな動きをしている部隊など存在しないと知っている、のようだ。

なるほど岡目八目とはこのようなことを指すのだな、と感心しつつも、どっちが有利不利かもわからぬまま、山地平地のドンパチで相互の車輛が脱落していった。

気がつくとも双方とも20輛いたはずの車輛は双方合わせて5輛にまで減っていた。こちらが3輛、向こうが2輛のようである。

その5輛は全て三方を建物に囲まれた空間に展開していた。まさに最後の戦いであった。この中にいるハタの立つた車輛を先に撃破された方が負け、らしい。

即座にこちらの1輛が撃破され数では同等になる。一方でその間に側面に回り込んだこちらのハタの車輛によつて、相手の1輛を撃破した。

その後は両者一進一退の攻防が繰り広げられる。正面から撃ち込まれた砲弾を弾いたり履帯の急旋回で砲弾を避けたりと、どデカイ車輛が行なっているとは思えないほどアクロバティックな動きが残り3輛によつて展開されている。

その激しさとは裏腹に結果はあっさりと出た。こちらのハタの車輛が敵方のハタの車輛に撃破されたのだ。こちらは他に1輛残しながらも敗退となった。これによつて県立の太子町大学が数年ぶりに県の戦車道大会で優勝を飾ることとなった。

とはいえこちら水戸大学は既に前回大会でシード権取つてたとかで全国大会に行けるそうだが。

嗚呼、その後である。

自分が彼女を『愛する人』として見るようになったのは。

撃破されていないこちらの最後の1輛、その車内の前方から出てきたのは、彼女で

あった。あの茶髪のロングの髪から顔、もう既に涙で歪みつつあった顔。そして車輛の上の人と同じユニフォーム。

そしてカメラにとつても印象的だったのだろう。優勝に喜ぶ相手チームを写して間もなく、観客席の前に置かれた画面には彼女の泣いている顔が全面に映し出されていた。

一度泣き崩れる彼女。ただそこから抜け出し、それ以上に動けなくなっていた上の人を支えて運び出す。

そしてその支えは暫く後の表彰式が半ばを過ぎるまで続いていた。相手チームの表彰の際の拍手も、無理矢理左腕を伸ばして全力で応じた。

画面は相手チーム含め横に何度もスクロールされていた。1チーム100人とかいるのだから。

だが自分の視点は彼女が映っていたその寸分のみに縛り付けられていた。神性すら纏っていたその姿に。

経緯をこうして振り返ってみても、この感情は自らが要求した返礼から導かれた自己満足以上の何者でもない。これを相手に強制させることのどこに生きる上での正当な

理由があるというのだろうか。

だがこうして確認したのは悪影響であつた。自らの胸の内で回想を繰り返して感情を圧殺しようとしても、彼女の顔と思い起こされるこれまでの些細な行動がこの気味の悪いものを膨張させて止まないのである。

これがなければ、自分はこの社会に生きる人間の一人としてもつと健全であつたはずだ。少なくとも血縁もないような人間の人生を徒らに操作したいと願う人間ではなかつたはずだ。

……時刻は昼前か、窓から差す陽光を鑑みれば。

……このやり方では自分の感情を納得させることはできない。説得では納得できない、ようだ。

……相手よりまず自分である。

自分のこの感情がこの後如何なる状況下であらうと揺らがず、抱え続けているもので



ある。それを自分が示せないままに相手を大切に思おうとするなどということは、欺瞞以外の何ものでもない。

この後今日の全てを費やして、彼女のことを考え思い続けることにしよう。水も食料もその他如何なる事情も廃して、この空調を切った酷暑の部屋の中で。

そしてそれを考え思い続ける中で苦痛や後悔を一切伴わないのであれば、少なくとも自分の中で変わらぬものだと考えられるのではないだろうか。

……それでも断言はできないのかもしれないが。

## 四

部活の過酷な夏合宿を挟み後期の授業が再開される中、心中穏やかではないものの平然を装って学生生活を続行していた。

仮に自分の心持ちが何十年先まで変わらないとしても、いやそれすら精々二十年しか生きてない人間が仮定すべきではないだろうが、相手がこの気持ちをもとに持たない限り強要するわけにはいかない。

彼女の、武部さんを愛するこの気持ちが見である、と自らを信用しようとせずとも、その点が明確に、少なくとも有意水準5%で彼女が同様の感情を持っていないと棄却できない限り動くべきではない。

破綻する、または将来的に破綻することによる恩恵など一つもないのだから。

彼女に頻繁に会うわけではない。ゴミ出しや大学に行く時に鉢合わせた際、少々立ち

話の機会を探る程度だ。初めてマトモに話した授業でもあれ以来特段話す機会はない。そして部活のない日の大学の帰り、火曜日がたまたま似たようなタイミングで自転車に乗る。向こうもその日は練習がないようだ。

その時彼女が自転車に跨り走り去る姿。それを自分も自転車を引つ張り出しつつ横目に見る。なんともみみっちいことであるが、隣人としての付き合いを除けばその程度にしていた。

最低でも現状維持でいいのだ。嫌悪されることだけは絶対に避けたい。その危機回避のために動きたいのだ。

とはいえせめて『少し仲の良い隣人』程度にはなっておきたいと、この心の中の奇妙な存在が導こうとする。

幸いなことに夏も終盤になった頃、父が何をトチ狂ったか段ボールの中に山のような野菜を詰めて送ってきた。しかも生野菜も混じっているものである。

父からしたらこんな出来の悪い息子でも気を遣ったつもりなのだろうが、こっちの部屋の冷蔵庫の大きさを考えて欲しい。冷蔵庫に合わせて物を買う、なんて生活をしてこなかったことが如実に現れている。

さて、体育会系に入っているが故に常人より飯は多く喰らう方であるとは思うが、この量を捌くのは厳しい。料理をしないわけでもないのだが、これだけの量を短期間でできるか、となると辛いものがある。

とはいえこの山ほどの野菜を前にできることといったら限られてくる。その中で有効活用できるのは人にあげることだ。

ということで話す機会になれば、と少々の迷惑は覚悟で武部さんのもとを訪れることとした。何か都合の悪いことがあつたら全ての責任をあの親父に押し付けてしまおうでしょう。

隣の様子を察するに、おそらく在宅だ。夕刻の飯の準備を始める時間の前、少々余裕がある時が良いだろう。向こうの冷蔵庫の中身の状況は知らないが、こちらも事情が事情なのだ。

夕方6時。まだまだ明るいがこのくらいがいいだろう。全体の3分の2近くを自室の冷蔵庫にぶち込みはしたがまだまだ重みのある段ボールを胸の前に抱え、廊下を3歩。

片手で持ち替えて少々髪を整え、いつときの空白を挟んでインターホンを鳴らす。

「はい?」

「あ、隣の高田です……」

「はい、ちよつと待つてもらえる？」

こうして向こうも気兼ねない態度で接してくださるようになったことが、自分の心身を良化させていることをひしひしと感ずる。それが少し落ち着いた頃に、こちら向きに扉が開いた。

「どうしたんですか？」

そして自分のほど近いところに彼女の顔が現れた。どこかに出かけていたのか、軽くだが化粧をしているようだ。

「あ、いえ……実家から野菜が送られて来たんですが、なにぶん量が多くて……そちらの都合さえ宜しければお渡しできないかな、と」

「いいんですか？」

「こちらの冷蔵庫に入りきらないので、できればいいので……」

「冷蔵庫ね。今余裕あるし貰う貰う」

「あ、ありがとうございます！」

他に今すぐ渡せる人間もそう多くない。幸いにしてこの段ボールを自転車に乗せて街を彷徨う必要はなくなった。

「ちよつと一回上がつて、玄関に段ボール置いてもらえる？」

「……失礼します……」

初めてその玄関の線を跨ぐ。越えた先から自室と同様室内を一望できるのだが、中は雑然とすることなく綺麗に整理され清掃されていた。何か消臭剤か香水かを使っているのか、微かにだが夏場に合う爽やかな香りが漂ってくる。

奥も軽く見たが、これが女性の部屋というものなのだろうか。カーペットや家具の色合いからも自分のものとは大きく異なる雰囲気がある。

玄関に敷かれたマットの上にはゆつくりと段ボールを降ろす。それを開けると彼女はまず中身の野菜を確認し始めた。

「えーつと、中身はピーマンにナスにズッキーニ、あとジャガイモもあるみたいね」

痛みつつあるものはこっちが優先して冷蔵庫に詰めたが、女性一人分としては多いのではないか。

「オツケーオツケー、このくらいなら全部入る入る。これだけ送られるって、高田くんの実家って農家？」

「いえ、ごく一般的なサラリーマンです」

「じゃあ、これは……」

「親父が大学生でも野菜食つとけつて意味で送つたんだと思います。けど、単にこれだ

け送られてもと……事前に連絡もなかったですし」

「やっぱ野菜つて下拵えいるしね」

「これの3倍くらい来たので如何したものと、と思いまして……」

「3倍?!? これですべてじゃなさそうだとは思っていただけ……」

「これがあの野菜の実際の量を見た時の常人の反応だろう。」

「残りつて……高田くんが処理するの?」

「一応やつて袋にでも詰めて使おうかと」

「料理するんだ」

「まあ、人並みでしようけどね」

流石に惣菜買ってばかりの生活では身体に悪い。予算の範囲内で東親で買って使うようにはしている。

「どういう料理するの?」

「ほぼ汁物……あとカレーです。早いですし量作れますしそもそもコンロが一つしかないのです」

「夏場も?」

「夏場は氷作っておいて入れたりしますけど、基本的には大量に汁作って捌いています。ブイヨンとか鶏ガラとかはまとめて業務用買い込んでますので……」

とはいえ練習も授業もあるのだ。そう多くの時間を料理には割けない。切って突っ込んで蓋をして換気扇を回せば暫く手を離して良い汁物とスイッチ一つ押して待てば良い飯は、この手の生活には手放せないのだ。

その点カレーも似たようなものだ。玉ねぎを炒めることすら手間であるので、全部突っ込んで煮込むところからやっている。

「今夜はこの野菜捌きたいのでカレーにします」

「やっぱり男の子ってカレー好きなんですか？」

「好き、というか手っ取り早くたくさん食べれるんで。だいたい飯に汁系一品です」  
「他のものも食べた方がいいよ」

「とは言いましても……」

その後彼女が趣味が料理だからと、月に数回惣菜をタッパーに入れて渡して来るようになった。

何がそうさせるのか知らないし、最初は手間かけさせる上に特段返せるものもないため、悪いからと断っていた。しかし断つても半ば押し付けてくるため、暫くすると半ば



あつさりと貰うようになっていた。

彼女の手料理と思えば食べたいと思うのは自然なことだ。自然と次を求めるために返すタッパーを毎回全力で綺麗にしていた。

こちらもカレーを多めに作ったりした時は『余ったのでどうぞ』、と渡そうとも思うのだが、向こうは女性一人。生活や考え方を鑑みれば、食べ物を渡すことには抵抗がある。なかなか行けていないが、今度旅行や実家に帰ったときに土産を調達してもまだ足りるか疑問だな。

それと並行して練習や学業の合間を縫って、県内各所での戦車道の試合も時々見に行くようになった。何度も見ていると何をしているのかも少しずつわかってくるし、ホームページなどを見れば彼女の役割や仲間なんかも少しずつわかってくる。

彼女は通信士、無線を使って他車輛と連絡を繋ぐのが役目らしい。

戦車道は常に履帯やエンジン、砲撃など音が響き続けるスポーツだ。普通の声では聞き消されやすい以上、その連絡は必然的にサインかイヤホンを繋いだ無線になる。

そして相手の動き、天候などに合わせ味方の作戦や相手の情報を逐一更新するため、全体の隊長の車輛を含め多くの車輛とひっきりなしにやりとりしなければならぬ。かなり高度な処理能力が必要とされる場所と言える。

ホームページを見た限り、彼女の乗る車輛は大学チーム全体の中でもかなり注目されるポジションのようだ。メンバーは全員2年生で構成されていながらチーム内で上から5本の指に入る主力車輛であるし、車長の彼女より濃いめの茶髪の女の子はホームページに短いながらもインタビュー動画が載せられている。

その顔に見覚えがあつて少し経歴を調べてみると、以前大洗女子学園で同じ車輛のメンバーだった人が、そのままこの大学にやつて来たとのこと。そういえば昔大洗女子学園の廃校の話があつた。彼女はあの時のメンバーの一人だったのだ。そりゃチームから期待をされるといふもの。

そんなチームで一定の立場を掴んでいる彼女である。無論そんな人間に試合会場で容易に近づくわけにもいかない。

嗚呼そうだ。ただ部屋が隣というだけなのだ。それを除けば彼女とは文字通り住んでる世界が違うのだ。

そう、自分は彼女の一ファンであれば良いのだ。世界が不用意に交わらない、それ自分を落ち着かせることができればいいはず……なのだ。

## 五

「どうしたら良いと思う?」

「押し倒せ」

「お前、俺を罪人にしたいのか?」

秋も深まつてきた。虫の声も盛りを過ぎ、長袖の上にセーターが必要になってきた。そんな中でも彼女との関係は変えずにいる。いや、変えられずにいる、とした方が正しいのだろう。

変えたいと変えるべきではない、後者が無理矢理にでも前者を抑え込もうとするも、なかなか気の持ちようというのは上手くコントロールできないものである。

大学で時間割が変わったからか、彼女を見かける日は前とは変わった。その中でも構内でふと彼女を見かける時、アパートでたまたま目を合わせる時、少し話す時。それに待ち遠しささえ覚えていた。だが積極的にその帳尻を合わせることはしていない。

こうして一人悶々としていても、解決すべきものかもわからないとはいえ解決には近づかない。根本的な解決になるかはわからないが、人に相談してみることにした。

そして選んだのが高校時代からなんだかんだ付き合いのある、正面にいる河端という男である。

ヒヨロヒヨロとした見た目だが背は190をゆうに越えており、並んで立てば自分の頭は此奴の顎先にすら届かない。その身長を活かして高校の時からバレーボール部でレギュラーをやっており、そして自分より一年早く同じ大学に入っていたのだ。

そしてその体格を活かして2年にしてベンチ入りメンバー候補になっている。

大学で自分もバレーボールをやる中で、高校時代より此奴との関係は深化しているように思う。高校時は同じ同学年の部員の一人だったが、大学では以前から面識あることもあり、今では最も付き合いのある人間の一人だ。

此奴を練習終わりに連れ出して向かったのは大学近くにあるパブである。イギリスのあのパブをモチーフにした酒屋だ。ビールやカクテルをはじめとした酒に軽食を頼める場所である。

だがこの手の店の飯類は値が張るのが世の常で、飯は近くの牛丼屋で掻っ攫った後に

地下のこの場へとやってきた。そして店の端に近いところにある丸い机の付いた立ち飲みスペースで、二人揃ってビールを頂いているのだ。

その名もパブクラフト。どこぞの神話生物を生み出す作家に語感が近いが、ちゃんとしたここオ리지ナルのクラフトビールである。エール系に近いのかサツパリ、スッキリとした飲みごたえである。

「おいおい、相談に乗ってる相手にその言い草はないだろ」

「それはお前のさっきの言葉を振り返ってから言えっつてんだ」

その酒の助けもあってこっちも少々口が軽くなり、色々と心の内をぶつけている最中なのである。

そしてこのノツポを頼った理由はその他にもう一つある。此奴去年のうちに彼女を作っていたのだ、自分が必死こいて予備校通いをしている間に。

まあ男目線で見ても顔立ちは悪くないし背は高いし、人をよく見て動け配慮もできる出来た人間だ。ど本命として女性に群がられる男とは違うが、彼女を探そうとして困るタイプではないだろう。

写真でしか見たことはないが、黒髪の清楚そうな人だったと思う。

「いずれにせよその好きな人とやらにすることは一つだ。とつとと告白しろ、玉砕したらそれはそれでいいじゃねえか」

「一理ある」

「だろ？」

「だが残り九里はない」

「なんで！」

「フラれたあとも隣同士の関係続くんだぞ？嫌すぎるだろ」

「そんなことかよ！」

それでもこれも理由の一つにはなっている。

「あとは……自分を信用できないことに加えて、将来を描けない」

「そりや大学一年のうちから将来決めてる文系の方が少ないだろうよ。して、自分を信用できないって？」

「好きな気持ち、という奴か？それが何者か分からない曖昧なものだから、いつスツと消えてしまってもおかしくない。それがこの先も続くものかどうか自分は分からない。

何を求める気持ちなのか判然としないんだ。何も求めたくないだろう」

「……まあ、求め過ぎないのは普通だと思うけどな。求めるもんって手に入ったら満足

して終わるし」

「その通りだ。だからこそ彼女を求めるといふ手段に訴えるのは正着ではないんだ。

仮に無理矢理にでも告白してその告白が通つたとしよう。その後こっちはその行動の責任が伴い続ける。

だが頼れるものは、告白した後ですら同じと保証できない曖昧模糊とした代物だけだ。それだけで何年何十年も続くと言えるか？」

「なんで今の段階で別れる可能性ずっと考えてんだよ」

泡の消えつつあるビールを残りが1/3になるくらいまで飲み干す。

「……別れたら何の意味がある？」

「何の意味って……」

「付き合うのだからって時間もいるしカネだって必要だ。体力や気力だって要る。それを費やして別れた先に何がある？ 人生経験？ 行った店の味？ その程度だ。」

「だったら付き合った後別れることのないよう熟考を重ねるのは当然だろ？」

「これもまたあの酷暑の自室で導いたものの一つである。」

「人生経験も捨てたものじゃないと思うけどな……」

「だが自分の経験のために人を巻き込むべきではない。人と付き合うのは現実の出来事

だ。夢や仮想で占有できるものじゃない」

現実なのだ。社会の一員としての行動なのだ。

「それにしても、お前はどのくらいの心持ちで告白したんだよ」

「どのくらいの、って？」

「告白前どんくらいの確率で告白成功すると思ってた？」

「うーん……そうだな、60%、くらい？」

「ひつく！よう行つたな」

わからん。ほぼ半分断られるじゃないか。戦略性も何もあつたものじゃない。

「フラれたらスパッと諦めるつもりだった」

「……そこまで割り切れるのか。羨ましいな」

「お前もそうしちまえば良いんだよ。というかそもそもお前さ、その彼女に彼氏いるか

確認してんのか？」

「……あつ……」

「おい」

そうだ。感づかれたりすることを避けるためこのような話は出さないようにしていた。日常的に見る感じに思いますが、実際にどうなのか聞いたことはない。

「そこ崩れたら意味ないだろ」



「そりゃあ、そうだ……な」

「そつちが現実見てねえじゃん」

このパブにはカウンターの近くにテレビが設置されていて、良く海外のスポーツの試合を放送している。今日は……どうやらイングランドのサッカーのようだ、というくらいこの手の話には疎いのだが。

ここがカウンターから離れていることもあり、内容がどうなっているのかはよくわかっていない。しかし野郎ぼつかりの他の客の様子を見ると、じっくり見ている人間がだいぶ少なくなっているように思える。大差でも付いてしまったのだろうか。

そんな中だった。

「何話してんのさ」

自分たち二人に話しかけてきた若い兄ちゃんが現れたのは。

「あ、いや……こいつが告白するかでウダウダやってまして……」

「そうなん？相手どんな子なの？」

河端が金髪のストライプが入った兄ちゃんに事情を説明していく。酒場で知らない人に話しかける人がいると聞いたことはあるが、実際に見たのは初めてである。

その見てくれもあつて警戒しつつ話を聞いていたが、やりとりしていくと単に話し相手のいいだけの兄ちゃんのようなようだ。タバコなどの売人とかではないらしい。

「その好きな子って同学年？」

「いえ、歳は一緒なんですけど、自分浪人してるので学年はこつちが一個下です」

「その子大学でどんなことやってるの？」

「戦車道やってますね」

そんな会話を続けることしばらく、その兄ちゃんは突然言い出した。

「君、聞いてる感じその子と合わないような感じするよ」

「ええっ！」

その唐突な一言に思わずらしくもない大声を出してしまった。

「なんというかね、君姉さん女房的な人が合ってる気がするんだよね。引つ張つてくれる人の方が」

「あー……確かにこいつはそつちの方がいい気がしますね」

「んで、聞いてたけど向こうから、って感じはないし、君も実質的に年下っぽく見えているところがあると思うんだよ。そうしたら先々ツラくなんじゃない？」

「そう……ですか」

「まあ、応援はするよ。早めに動いときなよ」

そうやってその兄ちゃんは別の卓を探しに離れていった。

全くの外部の視点から『合わない』の評価。それは自分の動きを一層硬くさせた。反論しようにも事実の部分はある。こちらが優位まで行かずとも対等な関係、もし可能性として存在するとしたらそのようなものを望んでいた。

その後彼女相手に動いたほぼ唯一のことは、また彼女が自室に友人を呼ぶことを伝えるにきた際に、その友人が彼氏の類でないか確認したことだけだ。

その際も『このアパートそこまで壁が薄くはないので、そういうことなら外で時間潰ししましょうか』という何とか捻り出した理由を付けて、だ。

「あははつ、彼氏なんていないよ。単なる戦車道の仲間よ仲間」

そう聞いて少しばかり安心したものだ。だが動くに足りる要素はそれ以上増えることはなく、ただの隣人としての時間が過ぎ去るばかりであった。

あの日までは。

## 六

ジャケットの下にセーターを着込むようになって暫く。年末年始を過ぎると、大学生が後期の試験期間が近づいてきているのを気にする頃になる。

かく云う自分もその一人である。前期こそなんとか大きな問題を残さない成績にしたが、前期後期両方合わせて結果の出る科目もある。それが特に落としたいくない語学なので、一層必死になるというものである。

そして年末の最後の授業くらいから、早い科目は期末課題が提示される。2000字とか4000字とかのレポート課題を、大学に行って課題図書や参考資料を必死こいて探しつつ、なんとか埋めて形にしていくのだ。

そしてその合間に語学の試験に向けた単語や文法の直前の勉強もこなしていかなければならない。

この試験対策はどれほどやっても安心というものは手に入らないものだ。覚えたと思っても本番忘れるものであるし、試験範囲の核と考えていたところが大外れとなれば

落単も遠くない。

レポートはまだ文書や資料を観ながら作れるが、試験はその手の持ち込みが禁じられるのが普通だ。その持ち込みが認められるものは大方試験の難易度が上がる。

確証が得られないとは、かくも難儀なものである。

そしてさらにこの時期になると、部活内部でも学生同士の立ち位置がおおよそ固まる頃である。将来的な各種役職の見込みだけではなく、この先レギュラーやベンチメンバーを掴めそうか、その展望という点でもそうである。

ちなみに自分はセッターもセッター控えも厳しくなった。結構強い高校から来た同学年の2人に勝って食い込めるビジョンが湧かないのである。下から優秀な人材が入って来でもしたら尚然りである。

ちなみにここの大学、県内大学リーグの2部リーグの中でも上位に食い込めていないところなのだが、その中ですら自分は戦力としての価値を失いかけている。

あとそうだ。この前会った河端はその身長を活かして、2年生にしてミドルブロッカーとしてスタメン候補にのし上がった。

こうなったらマネージャー等裏方に回ってしまつて経験を積んだ方が早いのかも知れないが、磨いてきた自分の武器のことを思うと未だにその雑念を捨てきれずにいる。

以前に作ってもらった料理の器を返すタイミングを調整したいから、と言ってアパートの同じ階のグループから彼女のLINEアカウントを手に入れていた。

しかしそのLINEもそれ関連の事務的なことにしか使っていないし、ここ暫くは向こうから連絡もない。

向こうも本来自分と同様試験対策に没頭しているであろう。特段こちらから連絡を取る要件もない。

部活関連や授業関連のグループのみ通知を許可して、ただひたすらに勉強に没頭していた。

もうすぐ日付を跨ごうとしていた頃、明日までのレポートをオンラインで提出し終え、寝る前に水を飲みつつメールとLINEのチェックを行う。

予想通り画面上の青いメールと緑のLINEのところから、赤い数字がこちらを突き刺さんばかりに警告する。これを見ると思わず開きたくなるのも、何らかの心理学的な理論が影響しているのだろうか。

だいたいのものはクラスLINEで試験対策絡みの話をしていたり、部活LINEで練習や活動絡みの報告、試験打ち上げの計画が流れたり雑談などに収まる。それを除けば広告とかだろう。

大概はその場で返事を考える必要などないものだ。あつたとしても了と解の2文字で片付く。

だがこの日は違った。あまり考えずに画面の赤文字を一つずつ消す中で、即座に消してはならないものを見つけたのである。

### 武部沙織

来るとしても大した要件ではないだろうと考えていたが、その後の文面には一層唾然とさせられた。



すまない、動揺のあまり文章を文章として視認するまでにちよつと時間を要してしまつた。再度確認する。

うん、可笑しい。

もう一度文面を確認してみる。だがその可笑しい内容しか書かれていないし、そうとしか読み取りようがない。

いや、まだ自分の勘違いであろう。勘違いなら勘違いを前提にはいけない。

いや真だ。

親戚から映画の優待チケット  
2枚貰ったんだけど、期限が  
3月末までなんだ。予定の合  
う時に一緒に見に行かない？

左端に寄ったこの内容に間違いない。

うん、間違いないんだよな……

自分を誘ってくださっているのはありがたいことだ。だがこれを易々受けていいものだろうか。

これによつて彼女との関係を徒に縮めようとするのは、自分を信じきれていない今踏み出して良い一步なのだろうか。

これがいい方向に向かう保証などどこにもない。これを機に一切の関係が無くなることだつてあり得る。それを自分は望むのか？

簡易ベットに寝つ転がり、再度文面を確認していく。

幸いにして口調なども見るにそんなに重い招待ではない。こちらが深く考え過ぎてるだけなのかもしれない。

だがそれにしても2人で、となると、多少なりとも隠された思惑を考えてしまうのは仕方のないことだろう。自分がそうあることを願ってしまう。

そう考えると映画であるというのは一種幸運であるかもしれない。上映中に互いの顔を見なくて済むし、喋らなくてもいい。自分からボロを出す機会が少ないということなのだから。

表示によると3時間前くらいに来ていたようだ。今日返すにももう日付を超えてしまう。

遅過ぎて起こしてもいけない。少し確認してから明日また返すとしよう。

次の日の朝、眠いぼんやりした頭をなんとかフル稼働させて絞り出したのは、

『1月は試験期間ですし、行くとしたら2月前半くらいですかね。試験打ち上げみたいな感じで』

できるだけ軽く、こちらでも深い意味を持たせないように配慮した。素っ気なく、いざとなれば自然消滅可能な動きで。

LINEで送られてきた赤いチケット入れと優待券の画像を見るに、この近辺でそのチケットが使えるのは水戸から少し友部寄りの内原という駅に近いところにある映画館だけのようだ。他はつくばや県外まで行かないと無いらしい。

ということで場所は決まったものの、詳細に関しては遅々として進まなかった。こちらでも休暇中の練習日程がなかなか出ず、向こうも春の大会に向けて忙しくなるかもしれない、とのことだったからである。

結果的にその詳細まで決める動きとなったのは試験終わってすぐの2月2日。受けた数多の試験結果を気にする余裕は既に存在しなかった。

自分の知る数少ない彼女に関する情報から、映画館の上映スケジュールの中で最も無難なものを探る。目下とある世界的女優のルート、前半生を映画化したものが候補だ。他がアニメものだったりR指定が付いてたりするものだったため、これしか無いということもあるが。

平日の朝早い時間の上映しかなかったのも難点だったが、幸いその提案はあっさりと受け入れられた。あとは日程だ。

映画いつ行く？

この先だと予定もあるので

9日以降にしたいですね

あ、そうなんだ。

そしたらこっちは10か

14が丸々空いてるかな

10はこっちが用事がある  
ので、14にしましょう

上記のやりとりの末に日程は決まった。

10日に用事があるというのは嘘である。部活もない日だ。だが自分はそうして  
でこの日することに踏み込んだ。

バレンタインデー、恋人の日とされるその日付にするために。

## 聖

前日の練習も激しいものであったが、それでもベッドの上で自分はなかなか寝付けずにいた。遠足前の子供でもあるまいに。

この行動で何が起ころのだろう。何もないだろう、何も起ころはずがない、と昂る精神を抑え込もうとしても、どうにも期待が湧き起ころこと自体を抑え込めそうにない。

だが幸いにしてそれは我が身の内のみで済みそうだ。外への発露なさそうなのだ。しないようにするのだ。

待ち合わせは内原の駅の改札外と決めている。家が隣同士なのに大学からさらに先の水戸駅よりも先の待ち合わせというのも変な話だが、互いの知り合いに出くわさないようにするためにも必要だと向こうも認めた。

向こうの実家は大洗の方らしく、大洗に知り合いも多い。その点でも反対方向の内原

は都合の良いものだそうだ。

日は地平線からそう遠くないところで白く照っていた。

早めに家を自転車車で出て、駅南中央通りを北上していく。車道の左の自転車用のところを風を切っていく。

家を出る前に確認はしたが、それでも自分のファッションに対する感性には自信がない。正装とまではいかずとも手持ちの私服の中で襟付きのシワのないものを選んできたはず。髪も珍しく油を買って付けている。

寒さでコートを羽織り、手袋にマフラーも巻いており、これらはほぼ外には出ていない。だがどこかに穴がないか。時間の都合上家を出たが不安は未だ募る一方だ。

その胸中と顔に当たる北風、そして鐘のように体を響かせる心拍。それだけで自分の身は構成されていた。

白梅二丁目の交差点を超えると道幅がぐいと広がり、水戸駅の上に聳える白いエクセルの建物がよりはっきりと見えて来る。そしてもう少し時期が下つたら岸辺に桜の咲き乱れる桜川を渡る。そうしたら駐輪場はすぐそこだ。



一日まるまる置いてくような日だと、置ける場所も多いし安いのでこの方が都合がいい。

白く染まった空中回廊の途中で、久しく使う機会のなかった電子マネーを取り出し、駅へ。真ん中に近い友部、土浦方面の各駅停車に乗り込む。列車が来るまでそこまで時間はなはずだが、ホームにそこまで人は見当たらない。

10両の長い編成が入ってくる。行き先は上野。人はそこまで乗っていない。

扉が開くと暖房のムワツとした熱気を浴びる。メガネの曇りをハンカチで拭いてから少しマフラーを口元から下ろし、一つ息を吐きつつ近くの吊革を掴んだ。

水戸から内原までは途中で赤塚を挟むだけだ。10分ほどで着く。

跨線橋を越えて改札口の方を覗き込む。彼女を待たせていたら申し訳なかつただろうし、まず間違いなく自分の評価は下がったであろう。

だが幸いにして彼女はおらず、自分の着いた次の列車、20分後にして予定の15分前に彼女は到着した。

「あ、ごめん待たせた？」

薄茶のセーターに白い綿状の襟、赤いチエツクの短めのスカートに黒い小さなカバンを持つ。

そう話しかけてきた彼女の姿は世界の如何なるものよりも麗しいものと思えた。

映画の内容については、自分自身正直よく覚えていない。少なくとも寝不足気味だった自分と眠気の対決を助長するものだった気がする。

余り裕福な生まれではなかった少女が街中で好々爺と会って声と踊りを磨き、プロデューサーに見染められ女優としてデビューする道を探る、そんな感じだったと思う。まあありきたりな出世物語に落とし込んだものだ。

恋愛要素が大してなかったのは幸いだ。その点を話題に出さなくて済む。

内原の駅から出て徒歩10分ほどでその映画館の入ったショッピングモールがある。非常に広大な敷地面積を持ち、その中に建てられた3階建ての施設も要塞を思わせるほど複雑怪奇だ。仮にゾンビが大量発生してもこの中なら1年くらい持久できそうな気さえする。

茨城大学の学生はここに良く集いがちだが、こっちの大学生は市内南の同系列のモールの方が近いこともあり、この広さもあつて知り合いと鉢合わせる可能性はより一層低くできる。

この施設には映画館だけでなく服、アクセサリ、家具、果てには美容院や薬局までありとあらゆる店が入っている。現在昼食のため入ったこのカフェもその一つだ。

「あ、このサンドイッチ美味しい」

そして窓際の席、自分の目の前で彼女はローストビーフサンドを頬張っている。量は少ないし財布には痛い、彼女と向き合えて座れるなら軽いものだ。

「本当ですわね」

飯を食べる間はそこまで話さない。向こうも一旦食べ終わってから話すようにしているし、人と会う時の最低限のルールだ。こちらも守る。

ここまで距離が近いからこそ、せめて嫌われるような真似、一層近づこうとする動きは慎まねばならない。

時刻は午後一時半を回っている。今からランチ、という人間は少なく、概して金に困る学生は広くて手頃なものも多いフードコートへ向かう。

今このカフェには他に4組ほど客がいるが、スイーツを着た商談か何かしているのが1組、幸い知り合いではない大学生らしきカップルが1組、残りは近所のオネエサマ方だ。

ランチセットには食事の後に飲み物とデザートが付いてくる。彼女はストレートティーとチョコケーキ、自分はコーヒーとショートケーキだ。

向こうのチョコケーキには光沢があり、バターをてんこ盛り使ったなかなかカロリーが高そうなものだが、案外そういうことを気にしない人なのかもしれない。

「そういえば、」

ケーキもほぼ食べ終わり、互いに飲み物に手をつける頃合いだ。全く話さない訳にはいかないが、無難な話で進めたい。

「今回のチケットくださったのは、武部さんの親戚の方でしたっけ？」

必然的に切り出せるのはこういう当たり障りのない話になる。

「そうそう。母の妹だから私の叔母さんだね。何で貰ったっていったかなあ……株主優待？」

「ああ、なるほど。それで優待券を……」

「そうそう。しばらく忙しくて使えないとかでこっちにくれて、お母さんも妹も使わな  
いって言うからさあ、貰っちゃった」

「あれ、武部さんって妹さんいらっしやるんですか？」

素直に知らなかった。というかこれまでも彼女の家族については寸分たりとも訊い  
たことがない。

切り口としては十分だ。

「そうそう、今まだ高校生。大洗女子に住んでる」

「武部さんが住んでいらっしやったところですよね」

「そうそう。妹の方は戦車道はやってないけど」

話し方なども見るに一家族として大事に思っていることが見える。色々な人のこと  
をよく想っている方だが、やはり家族は別格なのだろう。

「あ、できあ、高田くんの家族ってどんな人？前にお父さん？から野菜送ってもらってた  
けど」

「家族ですか？えっと、実家の親とあと関西の方に兄が一人います」

「お兄さんいるんだ」

「大学が向こうなんです、留年したとかで父が怒って生活費貰ってないはずなんです  
よね。しばらく会ってないのでわかんないですけど」

「あれ？正月は帰ってないの？そんな実家遠いの？」

「いや、実家はつくばなんでそう遠くはないんですけど、なんか帰りづらくて三ヶ日全部バイト入れてました」

「正月三ヶ日バイト？？」

「ええ、正直父も仕事人間でこういう時も休む人間じゃないですよ。どうせ暇でしたし、実入りも良かったですしね」

「バイト何やってるんだっけ？」

「水戸の駅の近くで塾講師やっています。なんで冬季講習ですね」

「小学生？」

「いえ、中学生相手に数学教えてます」

「やっぱり塾講師って大変なの？」

「いや、今教えている学年とかはそうでもないですよ。中学生なんで授業中は静かにしててくれますしね」

「そうなんだ。知り合いは事前準備は無給だから大変だし割に合わないとか言ってるめっちゃった。けど、人によるのね」

「校舎の正社員の教師さんとの相性もありますしね」

「確かに同じ職場の人とはねえ。それにしてもそちらの親御さんも正月いないかもって

ことでしょ。会えなくて寂しくないの？」

「元からそんなもんですよ。小さい頃はほぼ兄と自分で夕飯食ってましたから。今思えば兄ちゃん飯作り上手かったなあ。武部さんには及ばないけど」

「えつと……お母さんは？」

「自分母は小さい時に亡くしてます」

「あ、そうなんだ……なんかごめん」

「いえ、亡くしたの1歳の時なんで、記憶もほぼないんですよ。なので寂しさとかそういうのはあまり……謝られることじゃありません」

「そうなんだ……」

しかし考えてみれば、自分のこのカタチは片親かつ父が仕事バカであることで作られた気もする。

母に対する寂しさが無いと言えば嘘になる。幼少期に母に連れられて歩く子供を見かけると、尚更思うところがあつた。だが幸いにして両親を失つて子供だけで露頭に迷ったわけではないし、父の働きでこうして大学まで行かせてもらい、一人暮らしまで許してもらっている。

故に家の主人、総支配人は父だった。父に何かしら要求、抵抗するのならば、彼を『納

得』させることが何より肝要であった。

感情を理性で分析し、論理化してそれを伝える、自分でも勘の鈍いという父に対しては、一番有効なのがそれであった。

だからであろうか。あの言語化に難儀した感情に恐怖したのは。そしてそれ自体とその消滅の恐怖、二つを胸の内に秘めながら、それを露見させないように理性を働かせていた。

「ごめんね、なんか話が重くなっちゃったね。そういえば今日の映画、どう思った？」  
「今日の映画、ですか……あの女優、名前は知っていましたが、あれ程の環境から上がってきた人だとは知りませんでした」

「確かに余り知られてないよね。私も詳しくは知らなかったんだけど」

「まあ自分がこういう業界に詳しくないというのもあったんでしようけど」

「あれ？私は良かったけど、高田くんなどでこれを観ようと思ったの？」

「この上映スケジュール、他に面白そうというか女性をお誘いして問題ない映画が少なくて……その中で良かったのがこれで……」

「あ、あれそういうことだったの？」

「自分自身アニメ系とかも疎いですしね。そこら辺は昼間でもあるみたいなんです」



「子供向けかな？」

「恐らくは。外から子供の声もしますしね」

「子供は好き？」

「昔地元で保育園の手伝いをやったこともありますし、嫌いではないです」

「保育園の手伝い？」

「小学生とかの時ですよ。夏休みの数日間だけの」

「私保育園で午前のバイトやってるのよ。朝やってきた子供たち呼び集めて読み聞かせとかするの」

「武部さんにピッタリそうですね。子供たちから好かれそうですし」

「そう？まーでも楽しいんだけど練習もあるし午前2コマ、場合によつては3コマ目もギリギリになるから、週一が限界だね」

「スケジュール固定されるとコマも取りにくくなりますからね。あ、そうだそうだ。あの映画で思ってたんですが、逆境からの這い上がりという武部さんのいた大洗女子の話もそれっぽいなあ、と」

「あ、高校の時の話？あれ結構前よ。私が高2の時だもん」

「そうは言っても3年前ですよ。自分受験勉強が本格化してきた頃で、ニュースになつたのを聞いてなんだか勇気づけられたのを覚えています。その時はそこまで戦車道は

興味なかつたんですけど」

「前誘った後も戦車道見てるの?」

「時々見に行ってますよ。ウチの大学の試合以外にも余裕があれば顔出したりしてます」

「へー、じゃあ春の大会も来る?」

「恐らくは。武部さん春の大会大丈夫そうですか?」

「もちろんよ!ゼミの試験とは被らなそうだし、成績はちゃんと取ったし」

「なら良かったです。相手どこになりそうなんでしたっけ?」

「トーナメントこの前決まったんだよね。えーっと、信州国際大だったかな」

「どんな所なんですか?」

「山岳戦に強いところなんだよね。前にも一度試合したけど、今回も楽しやなさそう」

「そうなんですか……勝って欲しいですけどね」

こんな調子で滞ることなく話は続いた。戦車道の試合の話から違いの部活の話、そこから大学の授業の話になり今後のゼミの教授について。あとは同じ回の隣人の人たちについてなどなど。

自分が一の話題を振れば十以上向こうが返してくれる。それを受け止める。話題作りは得意でない自分にとって、向こうから話してくれる人というだけでやりやすいのだ。もつともその分此方には申し訳なきが募るわけだが。

そしてそれだけ長く話し続ければ居心地の悪さというか同じ場にいる辛さが出るものだと思うが、そういうものを一切感じない。緊張と疲れはあるが、それも彼女を前にできている幸福を思えば安いものだ。

だが時間は早く過ぎるもの。特に今の時期、冬場はそうだ。

外はもう暗い。時計を確認するともう夕方の5時半を過ぎていた。このままここで夕飯を取るわけにもいかないし、さつき水を入れに来た店員の視線が冷たい。

互いに話がひと段落付いたところで、こちらは切り出した。

「……だいたい遅くなりましたね。こんなに話すとは思っていませんでした。ここらでお開きとしませんか?」

「そ、そうだね……もう外暗いもんね」

「武部さん先程明日練習あると仰っていましたし」

彼女は明日は普通に練習があるようだ。大学構内の演習場ということだが、出かける

時間を隣で聞いているに朝は結構早い。

そりや自分のいる県下2部とはワケが違うのだ。競争も努力も求められるものが違う。

「じゃあ、こんなところで。僕が会計済ませておきます」

「あ……ちよつと待つてくれる？」

「はい？ どうしました？」

席を立ちかけた自分を呼び止め、椅子にかけていた黒いカバンから取り出したのは、ピンク色の小さな箱だった。

「……これ」

「……なんですか？ これ」

先ず期待したものではないと考える。これが深い意味を持つものでなければ、それで済んだ方がいい。

「……チョコ」

「……」

……

「バレンタインチョコ。頑張つて作ったから……」

「……え、自分に、ですか？」

「他にいないでしょ」

「……あ、ありがとうございます！」

……本物、なんだろうか。

「今まで女性からこういうもの貰ったことがなかったんです！」

まずこれは事実だ。どういう思いで作ってくれたかはともかく、貰うのだから素直に喜び、それを伝えるのはまず間違いないはず。

「そっか……良かった……」

帰りは水戸の駅までは共に帰ったのだが、二人とも一言も話すことはなかった。自分の感覚としては調子に乗って自分のことを喋り過ぎた自分を恥る思いだった。

だが隣少し隙間を開けた距離で彼女が吊革に捕まっている。その姿を少し見るだけで大きな安心を覚えていた。

赤塚を過ぎて暫く。次は水戸のはずだが、急に駆らしき光が目飛び込んできた。暗

闇、辺りに灯りも少ないのでそれは一層際立っていた。

偕楽園駅。隣接する日本三代庭園の一つ、偕楽園がこの時期になると梅祭りを開催する。その期間の休日に設けられる臨時駅だ。今日は平日だが時期としてはそろそろ。次の休みから営業するのだろう。

この名の由来は『偕（とも）』に『楽』しむ。

彼女と偕に。そんな願いはこの身に巢食った闇の一筋の光になるのだろうか。

## 八

練習の存在は自分にとって非常に都合の良いものだった。

練習開始の30分前に来て着替え、ポールを立て、ネットを張り、ポールを用意する。練習が始まれば走り、走り、ポールを拾い、ポールを拾う。終わったらすぐにポール、ネット、ボールを片付け、床全体にモップを強くかける。そして着替えて撤収。

それに無我夢中に取り組んでいる間は下手なことを考えずに済むからであった。

だがひとたび家に帰り飯と汁物、後一品付ける肉系のおかずを電子レンジからちやぶ台に並べていると、その下手なことが沸き起こる。

さらに部屋の奥の方、玄関からすぐに見えない位置に置いてあるピンク色の箱に目が付くと尚更である。

捨てるワケがない。中身を食べ終え、そのまま容器は軽く洗って乾かして保存してある。チョコレートそのものは甘くまるやかで、食べやすいものだった。

昨今ではバレンタインチョコは多種多様な形態を取るようになったという。友チョコ

コだとか義理チョコだとか。仮に向こうがこれをその一つとして自分に渡してきたとしても、自分にとって宝であることに変わりはない。

しかしこれを自身の先の行動を裏付けるものとしては弱い。彼女に自分に対する好意があると信ずるには足りないのだ。そう、先程述べた他の意義を持つものである。

それを自分は否定できないし、それをわざわざ尋ねるのも無礼というものだ。

現状ホワイトデーにちゃんとしたチョコレポートをお返しすること、それだけしか彼女相手に確定していることはない。

やはり現実には長時間彼女と話し続ける機会を得たからといって、自分が永く彼女を愛せるのか、その疑問が解決されるわけではない。可能性としては高まったとは思いますが、彼女を振り回せるものでは決してない。

自分を信用できない。そこに尽きるのである。

人を愛することとは、斯くも人の精神の中に問答をもたらすものなのだろう。それを持ち越え結論を出さねばならぬのだから、恋愛結婚とは決して楽な代物ではないのだ。

見合いは昨今ではかなり嫌われているものだという。好きな人を愛せないのだから、



と。

だが自分は彼女の存在さえなければ見合いで決めてもらった方が良かった気もする。相性なりなんなり悪ければそれと引き合わせた親が悪い、と自分を納得させられるからである。

だが自分は彼女を愛した。そして想いを永く共有したい、その願いを持っている。

そして向こうもそうなのではないのか、同じ想いを持っているのではないか。その川の中からとある一粒の砂を見つけるような確率が手元にあるような気さえする。

答えが出せない。

元々の自分はこのままの状況が続けばいい。向こうが大学を卒業する時に自然消滅する関係であろうと、その後の彼女の人生を狂わすよりはいい、そうであったはずなのだ。

それを超える欲求が止まらないこれはなんだというのか。そんなに自分は傲慢な性であったらどうか。

そう悶々とする間に眼前をひな祭りが目と鼻の先となっていた。家から少し離れたところにある商店街でも、近所の子供たち向けに店を飾りつけたり催し物を開催していたりする。

それは必然的にホワイトデーまで2週間もないということだ。

チョコレートを渡すだけで終わらせるべきなのか、動くのか。

その答えを出すべき時が近づいているということなのだ。

春休みはまだとはいえ今日は休日だ。買い物から自転車を通りかかると、飾りや催し物を前にしてはしゃぐ子供とそれを見つめる両親。それを何組も認めることができた。

これは彼らの良い部分だけ少し覗いているだけなのかもしれない。だが子供はともかくあの両親の片方が自分、もう片方が彼女であった時の光景は、夢想するだけでその疑念すら浄化してくれそうになる。

さて、そんな疑念より渡さねばならない現実のもの、返礼品の方が重要である。

その手のもので第一に候補に上がるのは、この前とは違い近くにあるショッピングモールか商店街、水戸駅の上のエクセルの中だろう。だが意外にもエクセルはチョコ

レート系統を売っている店は少ない。あるにはあるのだが、有名すぎてそこまで手を尽くした感じが出ない。

そのうえそこまで有名かつ地元が大洗だったとなると、買ったことのある店の可能性が高い。この近辺の店なら尚更である。

彼女が見たことのない店の中で、自分も信頼できる店。水戸にはここ数ヶ月でやっと慣れてきたような人間だ。この周辺ですらそこまで詳しくはない。

となれば、場所は長らく住んでいたつくばの街の方になる。つまり帰省だ。通学の際など何店か見た覚えがある。その中で休日にも人が並んでいた洋菓子屋が目的だ。

期限も考えて戻るのは3月12日。父には自宅のものを持って帰りたいから入ると伝えてある。昼飯だけでも家にあるものを貰っていこう。

つくばへは往路復路ともに高速バスだ。片道1000円ちよい、水戸駅から1時間半ほどで行けるし、鉄道だと土浦から別の路線バスを使うしかない。昔は土浦からもつくばへ鉄道があったというが、生憎自分も知らない時代の話だ。

朝9時過ぎに家を発ち、バスは11時過ぎにつくばの中央、つくばセンターへの辿り着いた。薄い屋根のついた停留所の一つで地面に足を降ろす。

この辺一帯は秋葉原に繋がるつくばエクスプレスの起点、つくば駅をはじめ、商業施設などが集まった市内の中核だ。大学はここから600mほどでやつと南端までだが、そこから北には縦長に大学の敷地が広がっている。

このバスターミナルの向かいには大きな公園がある。大きな噴水のある池に加え、保存された古民家なんかもある。この中を通り過ぎて10分少々歩けば、実家のあるアパートだ。

街は平日ということもあってか閑散としている。学生主体の街だから休暇期間は実家に帰る人間が多いこともあるのだろう。

コンクリート建ての不恰好なそのアパートの5階に、現在は親父だけが住んでいる一室がある。前は自分も兄も二人で一つの部屋を共有し住んでいたものだ。

階段を登り部屋の前でチャイムを鳴らす。親父はいるかは分からない。帰るとは言ったがいつ帰るかは言っていないのだ。

だが、居た。

「……今開ける」

親父の声だ。電話で話すこともあるからか、不思議と感慨というかそういうものはない。

「帰ったか」

金属のドアが重く開かれ、白髪を生やした親父が姿を見せた。

「一年振りかな」

「年末年始は良かったのか？」

「バイト入れてたし結構すぐ試験期間だったし」

「そうか……成績は問題なさそうだし、頑張ってるな」

「まあ、人並みにはね」

靴を脱いで上がる。目的は一応旧自室からの本などの持ち帰りだ。だが本命がある以上早めに引き上げたい。

自室は兄貴と自分の机と並んでそのまま残されていた。あまり立ち入って掃除もしていないようだ。

「言っていた本とかはあるのか？」

「ある。あとそのこの棚の親父の蔵書、何冊か借りていいか？」

「構わん」

「助かる」

黙々と作業を続ける。引越しの際も本などは持っていったのだが、部屋の広さと置けるスペースがはつきりしていなかったため、一部はこつちに残っていた。それをこの機に自室に移してしまおう、というわけだ。

「昼飯食うか？」

「貰う」

「夜は？」

「明日も練習あるし早めに帰るよ」

「……そうか」

「昼何あるの？」

「焼きそば」

これだけ長く親父と話したのは、自宅にいた頃を含めても久々だ。それだけ親父は寡黙だ。直近は自分が受験に追われていたこともあるだろうが。

昼飯の焼きそばは蒸す時に水を入れすぎたのだろう。少しビチャビチャな麺だった。作ってもらってるからには文句を言わずに貰うが。腹は膨れるし。

「……よく食うな」

「それでも一応体育会系だからね」

親父もかなり多めに作っていたようで、結局3玉分を腹に収めた。

「……やっぱり夜も食っていかんか？」

昼飯を食い終わりソファで一休みする最中、親父が背中側から声をかけてきた。

「ここまでゴリ押してくる親父はさらに珍しい。ただごとではない。何かある気がした。」

「……食ってつてもいいけど、遅くてもセンター19時過ぎの便には乗ってくよ」

「トナリエの中のバーガーはどうだ？」

「あれチエーンじゃん」

「嫌か？」

「まあ他はセンターから遠いしいいけど、俺片付けとか済んだら散歩に行くよ？」

「そしたら6時に店でどうだ？」

「わかった」

まあ晩飯代が浮くと考えれば悪い話でもない。生活費も定額制なのだ。

散歩と称して出かけた最中、目的の店に行った。一応スマホで営業日であることは確かめておいてある。実際平日ではあったが、この店の中にはすでに数人の客がいた。

しかしこの手の商品の選び方はわからない。女性一人向けだからそこまで量は要らないだろう。質の高いものの方が良いのか？あ、でも酒の強さ知らないしラム酒とか混じってるものは避けた方がいいのか？

ネット上でも店の評価は高かったし、昔親父が買ってきた時は結構美味かった覚えがある。悩んだ末に青いリボンの包装がなされた黒い箱に入った、4個入りの箱を紙袋に入れてもらった。

その後背中に本とチョコレートの袋を入れつつ公園などをウロウロし、6時前に指定されたチェーンの手ハンバーガー屋に着く。親父もすぐに合流し、すぐに大きめのバー



ガーをセツトで頼んだ。

店内は夕飯ときだからか4人席などは意外と埋まっている。レジの前では店内利用だけでなく、持ち帰りの人たちも列をなしていた。

まずは炭酸飲料を喉に入れてからバーガーの包装を剥き、逆さにして齧り付く。こっちの方がバーガーの中身が漏れ出しにくいとどこかで聞いた覚えがあるのだ。

ここまでジャンキーなものもそういえばあまり食べていない。

「んで？何か話すことあるの？」

口元についたソースを指で払い、紙ナプキンで拭き取る。

「ん……」

「親父が用もなく滞在を引き延ばすことはないだろ？」

「……一人暮らしは問題ないのか？」

「飯は作れているし掃除もしてるし仕送りもぶつちやけ貰いすぎてるくらいだし、特にこれといってないね」

「そうか」

「というか親父もあの家に清掃のヘルパーかなんか呼びなよ。トイレとかさ。今日はいたけど今だからだろ？今日自分たちの部屋はやったけど、結構あるぞ、ゴミ」

「……わかった。早めにやろう」

話が止まり、食事に戻る。用事を済ませられたので問題はないが。本当に向こうは大了した用事の一つもないのだろうか。あの親父が。

「……何かないの？」

「どうした？」

「いや、ここで晩飯食わせてまで、用事それっ、ていう。第二外国語単位ギリだったの叱るとかはないの？」

「お前が無事なら何よりだからな。それさえわかれば良い。ただ、交友も必要だが勉強はちゃんとやれよ」

「次はもうちょいマシな点取りますよ」

また空白。本当に無いようだ。

「……ありがとう」

「急にどうした？」

「いや、一人暮らしやらバイトとか始めてみてさ、親父の仕送りなけりや本当生活できてないからさ。改めて感謝するよ。もう少し減らしても大丈夫よ、仕送り」

「そうか。仕送りは減らさん。好きに使え」

「……わかった。知り合いの友人が小さい頃両親亡くしてると聞いて、俺は親父が居ただけ良かったと思ってるさ」

「その人はお気の毒だが、お前は覚えていないだろうがお前の母が亡くなった時も大変だったぞ。事故だったから急な話な上、残ったのは家事など妻に丸投げしていた父親だけだ。」

どう2人の子供たちを育てるか。あの時が人生の中で一番頭を悩ませたな」

「……その時どうやって踏ん切りをつけたのさ」

「踏ん切りも何も、目の前でお前は泣き出すしお前の兄はおもちや箱をひっくり返すからな。動くしかなかったんだ。そうしなきゃお前たちまでも喪つてしまう」

「……」

「あとは……悩んではいたが、悩むことは同じだ。いつまでも同じことを悩んでいてもしょうがない。」

……ま、その動いた結果が最善だったとは思えないがね」

「現にここまで生きてるんだから十分じゃない？」

「それはそうかもしれない。両方とも思っていた以上に大人になるのが早くて助かった」

「そうならざるを得なかったのさ。兄貴は俺以上にね」

「そうだろうな」

親父も自分も、ハンバーガーの最後の一切れを口の中に放り込んだ。

19時過ぎ。バスの灯がポオツと周辺を薄いオレンジに照らし出す。周囲には10人ほど、同じ便で帰る人だろうか。

「それじゃ、帰るわ」

バス停の近くまで親父は来ていた。飛び出してきたらしく春先にしては薄着なのに。

「また来るといい」

「そうだな……今年の夏は顔出せたら出すわ」

「わかった。悩んでることとかあつたら言えよ」

運転士が降りてきて、バスの横の荷物入れをぐいと押し上げようとしていた。

「……なあ、親父。最後にいいか？」

「なんだ？」

「覚悟って、どう決めるんだ？」

「覚悟？」

親父は一瞬惚けた顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻した。

「ああ、踏ん切りをつける上で、か。振り回されるのを受け入れる、だな。人相手でも、周囲の環境でも。何してきても全てを受け入れる。そんな感じか？」

こういう時でも淀みない答えが出る。これが遥かに優秀な頭脳を持つ人の力だ。自分は社会に出ても世の多くの人に勝てないと思うが、この親父はその一人だ。

「……そっか。それじゃ」

返事を聞き終わると列が動き出し、自分は親父に手を振ってバスの中に吸い込まれた。

バスは高速道路に入り、スピードを上げている。窓枠に肘をかけ拳を頬の下に入れて、窓の外は車の形かもわからない光の帯が時折右側へと流れていくだけだ。

全てを受け入れる、か。自分からすれば頭に「彼女の」、と付けるべきだろう。

考えてみれば、これまで悩んできたことはいつまで経っても同じことだ。自分は彼女を永く愛せるのか。その問いがずっと変わらず重しとなっていた。

だが……答えはわからない。この陳腐な頭では限界が来ているのだろう。

自分は……彼女を受け入れられるのか。一緒にいる機会が増えれば、嫌なところも性格的に合わないところも出てくるだろう。そうなっても自分は彼女と合っていると見えるのか。

自分は彼女が嫌いだと想定し得るだいたいの事象を受け入れられると思う。だが自分が嫌いなことを一緒にいる中で彼女に強いいることはあるのではないか？それを強いて彼女の生活、効用を害することを望むのか？

バスの外は相変わらずの光景だ。他の客は眠っているかスマホをいじってるらしく、ただエンジンの低い音だけが車内に響く。

カバンの中に入れたチョコレートは2枚のビニール袋に挟む形で保冷剤を大量に入れてもらっている。膝の上にズシリとくる感覚は、渡す機会があることをこの身に刻ん

でくる。

わからない。彼女に受け入れられるのか、彼女を受け入れられるのか。確約はない。だがこれから先悩んでも同じことだ。ずっとわからないのだ、恐らく。

いこう。

すつとそう答えが出た。

彼女の望むがままに自分は在れるのか。それが覚悟というなら、できるはずだ。

朝が来た。いつも通り鳴り出すアラームを、隣に迷惑とならないようにすぐに止めて飛び起きる。こうでもしないと体がきっちり目覚めないのだ。二度寝は後々に響く。

今日も自分は午前中から練習だ。練習は他の体育会系、バスケやバトミントン、卓球などの協議の未利用でできる時間が決まるため、意外と日程は不規則だ。2〜3日空く時もある、午前から午後までの練習が2日連続ということもよくある。

そして昨日もあり、今日も1日練習だ。社会は自分に都合良くは回ってくれないものなのだ。

朝早くに外の回収所にゴミを出し、戻ってすぐに飯を作る。とはいえそんな手の込んだものを作る気はない。パンを一枚焼きながら昨日の汁物を洗った器で電子レンジに入れる。これら2つに炊飯器を同時に使うとブレイカーが落ちるので、晩飯時は気を付けている。



飯を早々に食べ終えたら皿と箸を即座に洗い、洗い物立てに置く。帰って来れば水はほぼ切れている。その間にパックご飯をレンジにかけ、できたらラップを開き塩をかけて握る。これ3個が今日の昼飯だ。

最後にベッドの上の布団をひっくり返し、カバンに練習着とサポーターなどを詰めれば出発だ。

1年生は練習開始30分前には到着し準備に取り掛かる。

特に自分のような一年生の中でも立ち位置が悪い人間は、こうしたところで人に遅れては立つ瀬がなくなるのだ。せめてこの手のことで集団にとって利のある存在にならねばならないのだ。

部室棟の鍵を借りて部室からクランクを持ち出し、倉庫からポールやネット含め道具を体育館に運び込む。

自分が高校の時ポールは金属の非常に重い物で持ち運びに苦労したものだが、このポールはカーボン製で2本一気に持ち運べるくらいには軽い。

小物を体育館に置いてポールを床の穴に差し込んでいく頃になると、他の一年生もち

らほら集まってくる。彼らがボールやアンテナなど他のものを持ち込んでくる間、クラ  
ンクで収納時に縮めていたポールを両方とも240cm台後半まで伸ばす。

そこからネットを上に向け、片方をポールに引っかけ、もう一つはもう一つのポール  
に付けられた巻き取り機に取り付ける。

あとは中心部が弛まないようにクランクを差し直して全力でこれを引き締めるのだ。

そしたら他の人が持ち込んだアンテナをサイドのライン上に垂直になるよう取り付  
ければ、とりあえず準備は完了。

ここからはスタメン候補からなるAチームの練習前の準備だ。給水タンクにスポ  
リを山ほど作り、近くの水道にプラコップと一緒に配置。プラコップは全部昨日の時  
点で洗ってある。

ここら辺はマネージャーの仕事じゃないかって？県内でも弱いこの大学のチームに  
まともなマネージャーが来るわけないだろう。

それが済めば一年が自分たちで好きな練習ができるわずかな時間だ。自分もアタ  
カーにトスを上げたりサーブの練習ができる。

上級生が集まって来るとじきに練習が始まる。ランニング、ダッシュといったアップ

は全体で行う。

そして休暇期間のアップは平常時よりひたすらに長い。いつもは練習時間の都合もあつて30分ほどだが、この時期は9時からの練習で10時半は過ぎる。

それがやつとこさ終わる頃、だいたい人間はへたり込む。合宿の場合これを午前午後2回到朝のランニングが加わるが。

あとはAチームの練習がほぼ続く。自分らBチームはボール拾いとか紅白戦の審判などである。高校の時から審判、線審、記録員はよくやってきていたので、この手のことは慣れっこだ。

「タカダア！キイヌクナア！」

「スイアセン！」

練習の合間にこうして怒鳴られることもあるが、少なくとも今日は自分が悪い。

昼飯の握りも食らってから暫く、午後の最後の1時間。それがBグループに与えられた時間だ。自分も一応ポジションの一員なのでセッターとして参加する。

だがこうして練習することで自分の立ち位置が良化するわけではない。セッターで

スタメン候補に名を連ねるのは、上級生の他のセッターが5く6人は負傷離脱でもしない限りないだろうし、望むことでもない。

この場にいる限り、自分はどうにもならないのだ。何かしら別の立ち位置を手に入れるために、自分は動かねば変わらないのだ。

夕刻。日は落ちかけ、紅い空が窓の向こうから差し込む。

「オシッ！キョウコココマデッ！」

「アザッシター！」

この長い練習もここまでだ。主将の周りに集まって連絡事項を確認したら、上級生は早くも帰宅準備にかかる。自分はすぐにアンテナを外し、壁際に置かれたクランクでネットの取り外しにかかる。

先程の作業を逆回しにしてモップがけをがちり追加すれば20分。それにコップの洗浄も終わらせれば、やっと自分も汗を拭き取って帰れる時間になる。

すぐに荷物をまとめて帰宅。今日は飲みに行こうとかそう言う話は出てこない。自分にとっては非常に都合がいい。

自分は変わらねばならないのだ。自分の人生全てを賭けて、共にあるに相応しい人間であらねばならないのだ。

チョコレートを冷蔵庫で保管してから2回目の朝。それ即ちそれが彼女に渡る日、ということだ。今日以外の日は許されない。

今日の自分を突き動かしてきたのはたった一つ。

今日の夕方以降？いつも通り

部屋にいるよ

彼女からのこのLINEであった。

チャリで乗り付け、自室に戻ってきたのは夜6時前。荷物を置き洗濯物を洗濯機の中にぶち込むと、手を洗ってシャワーを浴びる。風呂を沸かす手間も水道代も惜しい。あ

とシャワーと一体だから泡を流すとすぐに湯船も泡だらけになるからわざわざ使う意味が薄い。

時間は指定してある。向こうも空いているという6時半だ。体を拭きドライヤーをかけた後着る服は、正装とまではいかずとも手を抜いたものにするわけにはいかない。彼女の前に出るに相応しい人間の姿でなくてはならない。

合理的な判断が効くうちに時間を指定して正解だった。仮にこれが曖昧なら、今の自分まともに動き出せないかもしれない。

もし断られたらどうなるのか。その疑念も未だ完全に晴れたわけではない。そうなった後の自分が如何なる存在になるのか。

突き詰め続け自分の体全てともなり得たこの風船が破裂したら、その抜け殻は本当に価値のないものに成り果てるのではないか。

正着だ。

あの泣き顔ひとつが由来で人を愛してしまった人間なのだ。その結末が来るならば、それをこの世が望んでいることなのだ。

手持ちの鏡で容姿を確認し、最後に冷蔵庫に入れていた箱を別建ての紙袋へ移す。

会う目的はこれを渡すこと。賭けるのはその上でサプライズ的に仕掛けることだ。無論この行動をサプライズ的に仕掛けない人間の方が稀なのでは、とは思うが。

そのサプライズというものも大概苦手な部類のものだが。

6時25分。玄関から少し奥のところまで正座し息を整える。

部屋の電気を全て落とす。そうすると外からの光は絶たれ、多少の音以外自分の感覚を妨げるものはなくなる。

どのような形というものが最善最良なのだろうか。

何を話すべきか。如何なる理由で彼女を想うようになったのか。その経緯も全て語った上で判断を仰ぐべきか。

息を吸い、大きく吐く。

また吸い、そして吐く。

行くしかない。

チャイム音。それが自分が向かう合図だ。

ドアから少し離れて待つと、向こう向きに扉が開いた。

「あ、高田くん。どうぞ」

「中へ、ですか？」

「上がって」

「はい」

言葉自体は前と同じように柔らかなものだった。だがその中に自分を動かす強さがあつた。

前も一度来たが、それともまた違う雰囲気that漂う。そして何より、その時はこうして



中へと踏み込むこともなかった。

軽い消臭剤の匂いと目に入る数々の女性らしい小物。あまり体感したことのない『女性らしさ』が支配する空間であった。

入り口にはハイヒールやブーツなどの靴がいくつか。彼女が靴を脱ぎ上に上がると、それらを避けて真ん中に足を揃える。

「失礼します……えー、はい」

また息を一つ。

「どうしたの?」

「これ、ホワイトデーの、この前のお返しです!」

その彼女の前に、持ってきた紙袋を差し出す。

これがそもそも受け取られるか。それもまた一つの指標だ。そしてこれは、すぐには受け取られなかった。

差し出す際に下げた頭を上げると、右手を口元に寄せ驚きを露わにする彼女の顔が少し高い位置にあった。

「……………この?」

「…………ええ。むしろ是非」

その握られた手が解かれ、ゆっくりと紙袋と自分の手の方へと伸ばされていく。そして紙袋は自分の手に軽く触れた彼女の手へと譲り渡された。

「…………ありがとう」

はにかむ彼女のその顔をへっぴり腰の変な姿勢のまま見つめる自分がいた。

その顔を見つめていると、それまで考えてきていた前座云々など、全て頭の中から抜き去られてしまった。

それらに大した意味はない。真なるものは何か。自らが自らに何度も問うたこと、それだけではないのか。

腰を上げ、背筋を伸ばす。正対しはつきりと伝えなければならない。

「もう一つだけ……宜しいですか？」

「はい……」

彼女も少し間を置いて、まだ紙袋を抱えたまま目を開いた。彼女が目の前にいる。自分を見ている。見てくれている。

「……色々考えていたんですが、全て飛んでしまいました」

今自分の持つ全ての気概よ、力を与えてくれ。

全てだ。全てでなくてはならないのだ。

「武部さん。あつて一年もせずつに言えることではないものかもしれません」

「この想いを持つのも初めてのことで、それでいてここまで進むのが善いことなのかもわかりません」

「それでも、言わせてください。」

好きです。付き合ってください」

言った。自然と頭がまた下がった。

これで、自分には言った言葉相応の責任が来る。だがそれと引き換えにしても、希望を通じたかったのだ。

そうだ。これはどこまで突き詰めても自分の我儘なのだ。向こうにも相応に断る権

利がある。

『それ、答えが来ないじゃないか』

心の魔がそう呟いてくる。

現に、返答がない。何も無い。静寂。

また、顔を上げた。彼女が笑ってくれればと思ったが、あったのは泣いた顔だった。

「あの……すみません。大丈夫ですか？気分を悪くさせたのなら……」

「違う……違うの……」

清潔なハンカチがポケットにあつたことをここまで感謝する時はこの先もなかなかないだろう。

「……ありがとう」

そうやって涙を拭う姿を見せる彼女を見れたのだから。

「……高田くん、覚えてる？」

「覚えてる……って、何をです？」

「ネコ……」

「猫？」

「ねこ？」

「捨て猫を見かけた時のこと」

捨て猫？

「7月頭くらいの時の……ゴミ捨て場の近くで段ボールに入っていた猫」

……ああ、だいぶ前のことだったが、燃えるゴミを出した時に子猫が一匹捨てられていた。

「あの時、多くの人がある猫を見ていたと思うの。でも、誰も何もしなかった。水も、餌も、何も入っていなかったから」

そうだ、そんなこともあった。けれどそれは彼女も言うように半年以上前の話だ。彼

女のことを意識してすぐくらいのことだったと思う。

「でも高田くん、貴方は違った。可愛がった後すぐに保健所に連絡を入れ、ここの管理人さんに引き継いだ。あの後すぐ出かけていったから、そこそこ忙しかったにも関わらず」

……自分の話だろう。半ば忘れていたことだが。

単にあの場にほつとも気分が悪いし、とつとと片付けようと管理人の方に任せただけなのだが。それにあの時近くに武部さんはいただろうか。

あれ以来その後を追ったわけでもない。保護されて良い飼い主のところへ送られていたといいのだが。

「……あの時、貴方のことをすつごく優しい人だなんて……思ったの。人の見えないところを見て、あらゆるもののために動けるんだって……」

あらゆるもののために動ける。

自分はまず自分のために動いたつもりだが……彼女の理想の存在であるにはその理想を叶える人間になる必要があるかも知れない。

だが、それもいい。

今度は向こうが頭を下げた。

「高田くん。こちらこそよろしくお願ひします」



……とかくかくしかじか四角い動きを経て、晴れて自分と武部さんは付き合うこととなった。

一月ほど経った今でも思い返してみるのが、この事実が真である、となかなか思えない時がある。自分でもその事に納得できない時がある。

それほど彼女は高貴で神聖なる存在だ。立ち姿、後ろ姿、顔が合った時の表情など、麗しさを覚える瞬間は玄関先など少しでも会うたびに。

その傍に自分があることが申し訳なくなるなど何回あることか。

だがそれでも彼女は自分を求めた。

「高田くん『が』いいの」

春休みが続く中で時々会うと、彼女は決まって自分にそう言った。

自分から告白したくせにそのことを彼女に励まされるとは、まあなんとも不甲斐ない人間だ。

だが付き合ってから早々の次の月、自分は結構多忙な日程に追われている。バレーボール部の新人の勧誘。いわゆる新歓の担当者となってしまうているからだ。

彼女にあの時期に告白するのを決めたのは、この新歓業務に追われる前に決着をつけたかった、そういう側面もある。

それに加え休暇の間、自分が告白した後には彼女の大会の遠征が挟まっていた。

遠距離ではLINEを送り合うのが精一杯である。その延長でいつの間にか朝には互いに連絡を取り合うようになっていた。

対面で会うこともあるが、以前と大きく変わったことはそう多くない。外面は一応単なる二人の人間なのだ。

朝早くに部員に集まるよう連絡をし、活動について新入生に紹介し、そして可能なら体験練習に引き込む。大体のこの仕事はBグループが取り仕切ることになる。

Aグループの方は5月の春のリーグ戦に向けての練習に追われるのだ。その見込み

のない人間がこの手の仕事を担うのはごく当然だ。

そしてこの手の作業は夜になっても解放されない。例えばT w i t t e rなどに直  
接連絡が入った場合、取り次ぐのは自分だ。

それに勧誘期間は限られている。この短期間が成否を左右する。

次の日に向けた勧誘の計画、その伝達などは勧誘作業、夕食を兼ねた歓迎会の開催な  
どが終わった後にやってくるのだ。

夜10時過ぎに帰ってきてスケジュール共有や勧誘方針の相談をして、日付を過ぎる  
まで続き寝る。そして次の日も朝早く大学に乗り込み、部室で勧誘担当者の出席確認な  
どを取っていく。それをほぼ3日間繰り返し返した。

それが終わっても新入生を新歓用のLINEグループに招待して、練習日程や食事会  
の案内などをノートに流す。担当が自分である以上やらねばならないのは自分だ。

そこから個別に新入生の出欠をとって店の予約を確定させる。それを何十人という  
人相手にやっていくのだ。

それらがやっと落ち着いてきたのが、4月の半ばごろとなってきた今である。

まだまだ仕事自体は加入状況や予算使用に関する最終報告を行う夏前まで続く。だが少なくとも夜まで仕事、ということはない。

今年の新入部員は恐らく去年、自分たちと同程度だ。ここで人数がスタメン表を埋められないほどにでもなったら、今度こそここでの評価は塵と消える。幸いにしてその心配は無さそうだ。

高校の延長線上であまり深く考えずに入ったこの部活だが、入ったからには仕えたいと思ってしまうのだ。

2年の前期の履修授業も決まり、中間レポート、試験の前の余裕のある期間が来る。無論日々の授業の即レポや小課題はこなさねばならないが、それでもその前後と比較すれば楽だ。

向こうも春の大会と新歓に相当するものが終わり、ひと段落ついた頃だという。互いの練習日程の間を縫ってだが、あの時以来のデートなるものを仕掛けてみる時ではあるだろう。

だがいぎ誘おうとなると、こちら辺に詳しくないことが仇となる。前に行った内原のモールにまた行くわけにもいくまい。

近辺の観光地としては大洗や偕楽園が挙るが、大洗は彼女の地元だ。自分が多少調べたとしても行ったことのある場所だらけだろう。偕楽園も梅まつりが終わったばかりである。

かといって遠くなればなるほど行くのも帰るのも容易では無くなっていく。袋田の滝や鹿島神宮とかなると、日帰りで行けるが一日がかりになる。

元々友人を遊びに誘ったりということもなかなかしない性分だ。好きな人を遊びに誘う場所なども経験がものをいうのではないか。

一番近いのは互いの自宅だが、さっすがに付き合って一月もせず自宅はないだろう。あの日以来彼女の部屋には立ち入っていない。

水戸の近くに行ってカラオケとかカフェ、なんてのが一番無難なんだろうか。またカフェ、というのも捻りがないが、その辺りが無難なのだろう。まずは彼女という時間を作るのが目的なのだから。

何か良さげなところがないものか。ベッドの上に寝っ転がり、県内の観光地をスマホ

で軽く漁ってみる。日本人は古くから番付が好きだった、という通り、ランキング形式で書かれているページがあった。

うーん、トップが牛久大仏にその後は大洗の水族館、筑波山、袋田の滝……ねえ。あ、ひたちなか海浜公園と大野潮騒はまなす公園、そういうのもあるのか。

彼女がたくさん話題を提供してくれる人なのに対し、自分は人の気を害さない話題作りというものが苦手である。自分のいわゆるコミュ力がクソだということだ。

となると公園とか美術館とか、外部から話題を提供してくれる場所の方が過ごしやすい。広くて名所もありそうなひたちなか海浜公園をまずは考えてみるのがいいだろうか。

人を誘うのに何も考えずに話をふっかけるわけにはいかない。その公園を進めて後は流れで行こうか。

まああーだこーだ考えたところで今夜伝えられる訳ではないのだが。

今日隣からは壁越しに少し賑やかな喋り声が聞こえて来る。向こうの部屋では今

久々に同じ車輛の友人たちが集まっているのだという。

自分は隣にいますが、何を話しているか聞くような趣味はない。

手輕に晩飯は食べたし特段急ぐ用もない。明日午後にはバイトもあるし、早めに寝て損はない。寝る前に筋トレでも少々やろう。

そう思った矢先のことであつた。眺めていたスマホの上から通知がひよっこり現れた。

へさおりん

○ 今時間ある？

今？

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？



へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ

ちらにご友人がいるはずでは？

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ  
ちらにご友人がいるはずでは？

○ その友達が会いたいんだって

邪魔にならないかと

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ  
ちらにご友人がいるはずでは？

○ その友達が会いたいんだって

邪魔にならないかと

○ とにかく来て！

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ  
ちらにご友人がいるはずでは？

○ その友達が会いたいんだって

邪魔にならないかと

○ とにかく来て！

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ

ちらにご友人がいるはずでは？

○ その友達が会いたいんだって

邪魔にならないかと

○ とにかく来て！

わかりました。少々時間はかかり

ますが、なんとか向かいます。

……なんか向こうの部屋に向かうことになってしまった。女子会の最中なのに良いのだろうか、と思うが、向こうが来いというのだから仕方がない。

こうやって彼女に振り回される中で向こうの恋愛観との齟齬を埋めていく、そういうものだと思っておくことにする。

流石にこの部屋着のままは向かえない。服を着替え、手土産になりそうなものも持つ

ていかなくってはならない。

服は良さそうなものをチョイスして着替えたが、土産は準備してないと良いものがない。

何かいいものはないかいくらか考えてみても、相応の品はない。それを持つほど贅沢な生活はしていない。

この手の土産は向こうの負担にならないよう消費できるものにするのが定石だ。

菓子類、食い物でも持つていけるものはない。夕食も残り物を搔つ攫つて終えたばかり……飲みかけの焼酎の酒瓶、くらい？

余った分は持つて帰れるし5人くらいと聞いているので飲む人一人くらいはいるだろうし、他に思い当たるものもない。

連絡から15分ほどでなんとか準備を整えた。

へさおりん

○ 今時間ある？

空いてますが、どうしました？

○ こっちの部屋来れる？

行こうと思えば行けますが、今そ

ちらにご友人がいるはずでは？

○ その友達が会いたいんだって

邪魔にならないかと。

○ とにかく来て！

わかりました。少々時間はかかり

ますが、なんとか向かいます。

今から行きます。

少々上に空白のある酒瓶を左手に、という側から見たら酔っ払いのスタイルで自分は

彼女の部屋の前にいた。そしてこの場に突入する緊張、それがこの仮説を一層裏付けるだろう。一応素面だ。

右手でチャイムを鳴らすと、向こうからドタドタと少し音がして奥に開く。

「あ、武部さん。高田で……」

扉の向こうにいたのは彼女ではなかった。

そこにいたのは彼女より拳一つ分背の低い、黒、に若干青みがかった髪をした女性、だった。

その女性がじつと、こちらを見つめてくる。表情には出てないが、睨むような氣を孕んでいた。

その人を見たことがないわけではないが、ずっと名前が出ない。

「……えーつと」

「お前が高田か」

その若干背中を丸めた女性は自分にそう問いかけた。

「え、は、はい。如何にも自分が高田ですが……」



「お前が、沙織の彼氏か」

そう、なんだろう。

「ええ、確かに」

「沙織のどこが好きだ」

その視線は鋭くこちらを向いている。一つの失言も許さない、そういう圧をこちらにかけていた。

この場にいるのだから彼女の知り合いではあるのだろう。彼女に対するこの執念に似た何か、知り合い以上の存在だと思われる。

「答えろ」

「……畏まりました。」

どこを、ですか……なかなか難しいですね。言葉で、論理的に、整然と何事も表そうとした自分でもパツと出てこないのですから」

向こうの視線をじつと見つめ返しながら、なんとか言葉を紡ぎ出す。

「最初は、本当に一目惚れ、とかいうやつだったんです。彼女が人のために、人のことを思つて動く姿、自己中心的な自分にはない姿、最初に惹かれたのはそこだったと思ひます」

酒瓶持ちながらこんなことを話すのも悪い、と一回玄関の脇に置かせてもらう。

「その後は隣人として付き合っていく中で、人となり、ひたむきな姿、人としての包容力の高さ、それらを知り自分の中で思いを深めていききました」

まだ、何も言つてこない。無表情の無言はなかなか恐怖だ。

「直近で会つた、それが自分の中に一種の確信に近いものが持てたところでしょうか。長い時間一緒にいても嫌悪感が一切なかった。むしろ長く居られるところに喜び、そして落ち着きがあつた。

この人よりも長く居られるなら、自分の人生の意義はそこにあつて問題ない。他の全てを捧げてもいい。何してきても全てを受け入れられる。

そう考えられたからこそ、奇跡というものを信じてみたくなつたのです」

これで、良いのだろうか。

自分の中の嘘偽りのない部分は答えたはずだ。もし問題があるとしたら、自分は自分のためにこの人を押しのける他ない。

「そうか」

時間をしばらく挟んでその人は小さくそう答えた。そして部屋の奥へと引き下がつていった。

なんだったのだろうか。こんな玄関先で答えはしたが、そもそもこれは何なのだろうか。

「あ、高田くん高田くん。ごめんね急に言っちゃって」

間もなく奥から彼女が現れた。エプロンをしているところを見る限り、何か料理していたのだろうか。

家庭的で可愛いと思う。

「いえ、時間は空いていたので大丈夫ですよ。それより本当に上がっても……」

「なんか友達が呼べってうるさくて……」

「ご友人ですか。先程玄関先にいらっしやったのも……」

「あれ？麻子行ってたの？」

「はい、黒髪の背の低い方が……そちらの」

彼女の来た方からさつきの方が戻ってきて、彼女の背後近くにつけていた。

「あ、麻子。高田くんになにかしたの？」

「いや、何もされてはいませんが……」

「さおり」

先程の人は今度は背を大きく伸ばして彼女の目線に近づいた。

「認める」

「何をよ」

「交際」

「親じゃないんだから」

よく知らないが、その人に認められたようだ。

後々聞いたら、同じ車輻で操縦手をしている冷泉さんだという。確かに大会時の選手一覧の冊子で見たことがある顔だと思った。

話を聞くに、前に話していた前々からの友人がこの人だという。そしてその他に同じ車輻の人だという3人が彼女の部屋にいた。

五十鈴さんと西住さんと秋山さんだという。同じく冊子で彼女と並んでいた人たちだ。

既にこの女子会が始まってから時間が経っていることもあり、飲んでる人はそこそこ酒が回っているらしい。持ち込んだ追加の酒は普通に喜ばれた。

「この人が武部殿の彼氏の方でありますかあ。マンシユタイム閣下つぼさのあるのかな

かのイケメンでありますなあ」

誰だそれ。

「あらあら、やつつつつと沙織さんにマトモな彼氏ができましたね。うふふふ」

「マトモな、は可愛そうだよ。華さん」

一躍この集まりの話題の中心に連れ出された自分は、周りの女性に経緯や内情を根掘り葉掘り聞かれる羽目になった。

冷泉さんが自分が玄関先で話したことを皆に話し、それを聞いて武部さんが真っ赤になつて顔を伏せているのが、このことを加速させているらしい。

彼女とのこの先の関係が続けるには、彼女と近いこの友人たちとも良好な関係を築いておきたい。

皆さんは高校時代からの付き合い、特に冷泉さんは小学生の頃から、ということもあり、自分より彼女に詳しいに違いない。彼女と一緒にいる上でサポート役はいて損はないはずだ。

あの会場で画面越しにいた人たちが、自分の前で寛いでいる。なかなか奇妙な光景で

ある。

彼女とも話し、友人たちとも酒を酌み交わす中、この夜の時間は早く、しかし濃密に過ぎていった。

これほどの友人に愛される彼女と付き合えている、その幸せを何度も何度も噛み締めながら。

幸いにして彼女との関係は今も続いている。

実に奇跡だと思う。世に別れ話は尽きないというのに、それを回避し続けているのだから。

バレエ部内でも彼女のできる者はいるもので、できる者もいれば別れる者もいる。

しかしその内情を話したがる者はいないし、他人も腫れもののように触りたがらない。相手が誰かもわからない。パターンが大部分なのだ。

自然自分のまわりで『なぜ付き合った人間が別れの道を歩むのか』、その解答は闇の中に埋もれたままだ。

だが状況の変化によって厳しくなる側面もあるのだろう。理由の少しはそこにありそうだ。

大学生とは自由な時間を持つ生き物だ。縛るものは中高のころより少ない授業とそ

の課題だけ。

あとはサークルなりバイトなり趣味なり研究なりガクチカなり、好きなことができ。恋愛もその一つだし、あつてしかるべきだろう。

そこからの転換点のひとつは就活であり、就職だ。直近は転職などで自由度が広がっているとはいえ、特に自分のような文系学生の大半にとつては社会人として人生の方針を決める一大事だ。

そして昨今では夫婦揃って共働き、というマルクスおじさんが『道德の破壊だ!』と叫びながら発狂しそうなスタイルが基本だ。

将来の生活のあり方、互いに求める理想像、そして収入など。ありとあらゆるものの解釈、そのなかでの僅かなすれ違いが破局なるものを促進しているのではないか。

就活の経験を思い返しつつふと考える。

彼女はもう今年の頭から社会人。

それより前、本格的に互いの同意を得てから、向こうが昔から揃えていたという結婚情報誌の山を前に、それらの解釈については少しづつ擦り合わせてきている。

こういう本を集めるのが昔からの趣味だったようだ。こうして役に立っているし、この先も口を挟まずにいよう。



もつとも他の要素もある。いわゆる熟年離婚なら老後のあり方の価値観などが絡んでくるし、生活を続けて嫌気がさすこともあるだろう。そしてそれは実際に見てみないとわからない。

関係が未永く、死が二人を分つまで、と願うと、その障害は気の遠くなるほど先まであり続ける。

全て解決できる時、それは死だ。

そしてそのことを考えるたび、『振り回されるのを受け入れる』、父の言葉の意味が少しずつ解きあかされているように思う。

彼女の望む生き方を知り、まずそれを受け入れ、そのうえでそれを支える人生を受け入れる。彼女がいること、その解釈を超える人生の意義を感じられない中で自分が見つけた答えだ。

彼女に告白するときに抱いた自分が定めた自身への責任。自分が動いたからこそともなうもの。

その存在を忘れていなかった、そもそも想起していた過去の自分にはちよつとばかり

礼を言いたい。

どこぞの学長が

『男なら幸せになろうと思うな。幸せになるのは女と子供だけでいい。男なら死ぬ』

と言っていたらしい。

彼女と付き合い続けたからこそ言える。

この言葉を性別を変えたり変えなかつたりしつつも互いの胸に秘めた状態、それこそ真の愛なのではないか。

そう、ほざいてみたくなる。

彼女とのこの関係が長く続いている理由、それは自分が彼女を愛し、愛しようとしてきていることもある。

だがそれ以上に彼女も自分に愛を向けようとしてしていることだろう。自分もその手のことはいろんな場所面でためらいなく積極的に言うようにしている。

言葉なくして互いの気持ちを理解しあえるほど、自分たちはまだ成熟していない。

それにしても今日の空間は異質だ。いつもいたはずのポジションが、少し弾力のある高い壁一枚挟んで上のほうにある。

そして自分は練習着ではなくめっちゃくちやマトモなユニフォームを着て下のほうにいる。

本当にここのオジサン監督はなにをとち狂ったのだろうか。

自分の人生で最後のバレーボールの大会、秋の大会の選手登録名簿に自分の名前を載せ、いくらリーグ内の順位がビリ確定になった最終盤とはいえ、ベンチメンバーで起用するとは。

個人的にひいき起用ならむしろ辞めてもらいたい。こんな4年の老害一步手前に機会を与えるよりは、1年2年の期待の若手にこのポジションを譲ったほうが、翌年以降のチーム編成を考えても有意義だ。

反発しようか迷ったが、自分は監督のところに行きメンバーから外すよう求めた。理由は前述の通りだ。だがそれでも外すことはない、としてきた。

もうすぐ引退とはいえOB会の存在もあるから、出場機会を奪ったとあまり後輩に睨

まれたくはないのだが……

出るからには機会が来たら全力を尽くすほかないが、大学バレーにもなってピンチサーバー要員をベンチに置くなど普通ではない。

ベンチ入りできるのは12人のみ。そして試合には前衛後衛3人ずつの6人とリベロの合計7人が出る。ベンチ枠はたったの5人なのだ。

換えがきかない専門職のセッターは怪我時などに備えて控えが必須だし、アタッカー、センター、オポジット、要するに両翼と真ん中を守る控えは欲しい。さらに言えばリベロにも控えがいる。

もうわかりだろう。これら一人ずつサブを入れて5人なのだ。自分は一応セッターのサブもできるとはいえ、ちゃんと正規のセッターのサブもベンチ入りしている。つまりいらぬのだ。

……これももうわかんねえな。

自分らのチームの試合は午後。午前中は同じ会場でリーグ内の別の2チームが試合

をしている。しかも1部リーグへの昇格のチャンスを賭けた一戦だ。自分たちとは気合の入りが違う。

その間自分たちは体育館の裏の空き地でダッシュなどしてアップを行う。

いつもなら他チームの観戦や必要があれば審判員のサポートをしていたはずの自分が、まだまだ残暑が続く中で走り続けているのも落ち着かないものだ。

「腿上げダッシュ3本、全力でっ！」

「オオイ！」

いつも以上に声を張り上げ、できる限り全力でやり続ける。どう考えても戦力ではないとはいえ、最後の機会なのだ。後悔はしたくない、そう思いたくなってしまふのだ。

太陽がだいぶ高くなったところ、出口の方からそろそろと人が吐き出される。どうやら前の試合が終わったようだ。

開催日が土曜日、そして上位争いとはいえ県内2部リーグ。ただでさえ大学バレーなんてそんなに知られていないのに、それでいて全国大会にも行けるかもしれない1部リーグとは人気度がちがう。

出てくるのは幾らかの学生と少しの大人。女性の比率が若干高いが、男性もちらほら

いる。選手の大学での友人、といったところだろうか。

一部リーグの試合も何度か見たことがあるが、あちらは上位チームとなると応援団と熱心な学生のファンが来る。

「おし、行くぞ」

しばらくして同学年のキャプテンの指示を受けて、会場に入っていく。既に体育館の裏手で広げておいたボール籠を押し出し、飲み物やタオルなどもマネージャーと揃えて、試合前の最後の練習に臨む。

会場では学生の放送部によって次の試合の案内がなされていた。相手は納豆国際大学、決して納豆くさい大学ではない。

こんな名前ながら一応扱いとしては自分らのところとおなじ国立大だ。元々私立だったのが国立に再編された形だが。

向こうはリーグ4位、こっちは最下位の6位、ほぼ確定だ。

向こうは既に勝ち点3を数試合取っているが、こっちは今まで文字通り全敗。今日と

明日で両方勝ってやつと5位の勝ち点に届く。

そこから得失点差の勝負なのだが、これが18点引き離されているのでだいぶ厳しい。

つまり25-22を3セット全てでやって完勝、これを2日連続しなければならぬ。特に大差で1セット取られるとかなりキツくなる。

だからこそ自分をベンチに入れるようなことができたのだとは思うが。

向こうも試合会場に入り、左右に分かれスパイク練習を始める。自分はスパイク打てないのでリベロの後ろでボール拾いの手伝いだ。

そしてサーブの練習を終えて、試合開始10分前。向こうから公式練習に入る。コート全体を使って行える、試合直前の3分間だ。

その間自分たちはベンチで待機だ。初っ端サーブ練習なのでボールをコートにばら撒く準備はしておく。

向こうは先にスパイクから入るようだ。セッターがネットの中央にカゴを持っていく。

「真一く〜ん」

右奥の客席から声が。それもヒジョーによく聞く声だ。

ガラガラの客席の中でその姿は一際輝いて見えた。

笑顔で手を振る彼女の姿は。

前に今回ベンチメンバー入れるかも、とは言ったためか、今日この手の場所に初めて来てくれた。今までは自分があつた場所にいたので、気恥ずかしいのもあつて呼べていなかったのだ。

こうしてユニフォーム姿を見せられるのは喜ばしいことだ。

とはいえいくらなんでもここから思いつきり応えるわけにもいかないし、見とれるわけにもいかない。後ろには他の部員たちがいるし、なにより試合前だ。

特に見せられることもないが、せめてしつかりこの部活でやってきたことは示さなければならぬ。

「高田」

後ろのメンバーから声。

「ハイ」

「お前の下の名前って真一だよな」



「ハイ」

まあ、目立つわな。

「客席で手え振ってんの、あれお前の彼女？」

「……ハイ」

「めっちゃ美人じゃね？」

「じぶんでもそうおもいます」

頻度は減ったが、今でも時々信じられないほどに。そしてその彼女が自分を愛しているのがなおさら。

顔は正面を向いたまま、この小声も正面からの練習音で掻き消される。

だが後ろからの声はある程度怒気を孕んでいるように思える。

「明日の夜飲みで話せよ」

「話すだけなら」

タイマーが鳴り響き、向こうの試合前の公式練習が終わる。

「サーブ！」

号令一つでコート of 左右に向けボールを撒く。頭の上をボールが飛び交い始める中で、最後の一つを持って自分も練習に加わる。

まだ今のところはフローターで様子見だな。

その後はポジションについてアタッカーの練習。自分はネット越しにボールを打ち込んでいく。

練習時間はかなり限られる。一球でもミスすることは許されない。ボールをあげる高さ、打ち込む位置、場合によってはフェイントを挟んで味方の予測をぶらす。

かといって相手は味方である。取れないボールを打ち込むつもりはないし、下手なミスから調子を落とされても困る。つまり取れてスパイクまで繋がられる球でなければならぬ。

さらに各ポジションのボールに触れる頻度やいつもの自分の打ち方との差の付け方などなど。

これらを総合的に勘案し最適な軌道を瞬時に算出し、休ませることなく仕掛け続ける。

それを十数球こなせば、またブザーが鳴って終いだ。自分はベンチメンバーの一人と

して、ボール籠をベンチに戻しエンドラインの右から3番目に並ぶ。

センターラインの左側のキャタツの足元にジャケットを着た主審がより、左右に広げた腕を中央でクロスさせながら笛を鳴らす。あ、ここブザー式か。

「シャッター」

互いに中央に移動。小声で手を取り合つて挨拶を交わす。

そしたら後はひたすらに出番待ちだ。そもそも来るのか、来るとしても第何セットになるのやら。

ただ全力でベンチから応援し、呼ばれたら即座に行く準備を整えておくしかない。

その出番は、予め予告されていた。

向こうはシーズン結果がほぼ決まっていたこともあり、来年以降の新チーム主体の編成だった。そして自分を入れるようなよくわからない編成をしたこちらのチームは、何故だか2-1でリードしたまま第4セットに入っていた。

勝てそう。

このチームに3年半いたものとして、あまり経験したことのない光景だ。

そして監督からこのセットの後半での起用が始まる前に告げられた。

次のセットにまでもつれば、いくらなんでも出番はあるまい。つまり初めてなのにラストチャンスなのだ。

23-17

こちらのスパイカーがレフトから強烈なスパイクを打ち込み、こちらにサーブ権が回ってきた。

監督が審判に交代を告げる。審判がブザーを鳴らしながら交代の合図をした。

背中を押し出されベンチから飛び出して、ボールを持った選手と交代。副審が記録員が記録を取れたことを確認して、再度ブザーを鳴らした。

ピンチサーバー。

1セットで40本50本と飛び交うサーブのなかの1本、打てて数本、それが己の仕事場だ。

ボールを引き継ぎ、コート後方へと向かう。

「真一く〜ん！ファイト〜！」

顔を上げると、また大きく手を振る彼女の姿があつた。

目が合った。彼女が、いる。すつと体の奥が熱くなる。

きつとここで、この大学人生4年の重大事と呼べるここでネットにボールをぶつけたからといって、彼女が自分を嫌うとか不甲斐ない人間だと思ふとか、そういうことはないだろう。

2年以上付き合っていれば少しずつだがわかつてくることもあるのだ。

だが、それに甘えることだけは許されない。彼女の寛容さを理由に緩くなつたとしたら、それは別れの時が近づくと証だろう。

愛されるための努力なしに愛を受け取る、これこそ真の傲慢なのではないか。

だからこそ、ここで自分は仕事をしなくてはならない。

結果はわからない。結果を出すためにこれまでも練習前や練習の合間などにサーブを打ち続け、鍛えてきた。自分のチームの選手を実験台にして突き詰めてきた。そのことに自信はある。

それでもあのチームの選手相手にそれが通用するかはわからない。打ってみて拾われてみなければ、ダメージを与えられるサーブだったかは知らないのだ。

会場の視線が自分に集まるのを感じる。その中の一つに彼女のものがある。それがどれだけ自分の支えとなっていたか、限らない恩恵を受けてきた。

今、ここで、この場で、解き放つ。

恐れずに、最大限でできることを。

いつも通りに小さくボールを投げた。